

伊能忠敬研究

史料と伊能図

二〇〇一年 第二九号



伊能忠敬研究会

## 米国議会図書館蔵 伊能大図部分「ニシベツ」付近

伊能測量線最東端のニシベツへゆく機会があつた。測量日記では「風連湖を船でわたり、海岸沿いにニシベツまでいつたが、鮭漁の最中で船や人足がえられず、これから先へは行かないですむなら、やめてほしいと断られたので、天測をして引き返した」とある。

そのニシベツの場所だが、地元の郷土史家・吉川さんの話では、ニシベツとは、ニシベツ川河口の南側部分の地名で、北側は別海(ベツカイ)といい、昔からそうだったとのこと。そして、ニシベツ地区には魚の加工場と客館はあつたが、住民は住んでおらず、集落になつていなかつたという。(いまはこの地区全体を別海という)

伊能隊は、だれもいないところで天測をしたのであろうか。ところが、米国議会図書館の伊能大図によると、天測地を示す☆印は、ニシベツ側ではなく、別海側についている。ニシベツ川河口の☆印は成田山の中図、東京国立博物館の中図には描かれていないが、米国大図のこの部分にはハツキリ記載されている。

忠敬さんに別海のことをニシベツと教えることもないと思われるが、忠敬は川の向こう側で地名を聞いて、こちら側も同じだと思い込んでニシベツとしたのであるうか。ニシベツ川にはいまも鮭が遡上する。シーフィンには沿岸は海釣りで賑わうという。将軍に献上したという献上鮭はいまで、大変な手数をかけて作られている。

(渡辺)

(題字は伊能忠敬の筆跡)

## 最近の話題

## 新史料・忠敬書簡の発見

例会・総会報告、前年度経過報告

忠敬の天体観測書発見 新潟日報から

伊能大図に彩り再び 朝日新聞から

## 芳名録より

## 研究ノート

## 近代での伊能図の働き—軍管区図—

## 『官板実測日本地図』論考 (二二)

## 『伊能家文書紹介20』忠敬と間宮林蔵 (一)

## 南三陸沿岸での伊能隊の足跡

## 加賀藩天文曆学者 西村太冲 (二)

## 『江戸日記』忠敬宅への来訪者と訪問先 エッセー

## 感謝の気持ち・伊能ウオーカーの思い出

## 伊能測量隊「宿泊地一覧」作成にあたつて

## 地域史料紹介

## 伊能忠敬の江戸在住日記 (八)

## 事務局日誌・日々の話題から

・アメリカ議会図書館とは  
・コラムから「期待される老人像」

## 支部便り 九州支部春季例会

## 忠敬談話室だより

会員の近況報告より  
(入会案内・編集後記)

							編集部
石川	上田	河崎	伊能	一〇	五	九	六
山本	坂本	佐久間達夫	陽子	一	五	五	一
公之	佐久間達夫	高木崇世芝	一	四	一	四	
六三	事務局	安藤由紀子	一	〇	一	〇	
六〇	福田	渡部健三	二	四	二	四	
五八	清一	河崎倫代	二	八	二	八	
五七	坂本巍	佐久間達夫	三	九	三	九	
五五	佐久間達夫	高木崇世芝	一	四	一	四	
五二	事務局	安藤由紀子	一	〇	一	〇	
五	福田弘行	渡部健三	二	四	二	四	
四	佐久間達夫	河崎倫代	二	八	二	八	
四四	高木崇世芝	佐久間達夫	一	四	一	四	
四	伊能陽子	伊能陽子	一	〇	一	〇	

新史料・忠敬書簡の発見

編集部

新史料発見の経緯

卷之三

キツカケは北海道の高木会員からの電話だった。「大阪古典会百周年記念入札会の目録に、伊能忠敬の書簡が売りに出ている。忠敬の書簡が売りに出ることは一〇〇年以上なかつたようだ。内容は娘のお稲の勘当をさし許すというものだ。非常に珍しいことだと思うので、お知らせする」という件だった。高木さんからは、これまでにも貴重な情報をいただいており、新史料発見の名人のような方である。

これまで、忠敏の長女のお稻さんは、わけあつて勘当されたといわれてきているが、その証拠となる史料が現存しないことは、会員諸兄姉の研究でわかつてるので、この書簡が本物なら、史料価値は十分であると感じ、目録の写しを送つてもらう。

目録には、たしかに写真があつて、キヤブ・ションで娘の勘當さし許し状だとある。しかし、古書店の読みをそのまま信ずるわけにはいかないので、せめて、ハツキリ読めるところだけでもベテランに見てもらう必要があると思い、カタログそのものの送付を依頼した。

書簡の内容を確認する

藤栄子さんに読んでもらう。伊藤さんは、佐久間さん執筆の伊能忠敬先生日記の中の江戸日記を再読してもらった関係から、忠敬筆跡には通じている。

読めるとこだけ読んでもらつたが、忠敬筆跡には間違いない。見

新由料発見のニュース 産経新聞・5月25日

えない部分が一部あるが、肝心な場所は読めるから、勘当の許し状であることは確かだという。

さて、どうするか。新聞記事にすることは難しくないが、価格が上がってしまう。小田原で発見され、安藤由紀子編集委員（当時）が解説して、朝日新聞の堀田記者（当時）に記事にしてもらった測量隊員の日記は、愛媛県立歴史博物館におさまるまでに、大幅な値上がりとなつたことが思い出される。

しかし、好事家の手に入つたらまず出てこない。オープンにすれば、行く先の追跡もできるかも知れない。どこかに収まつて世の中に出でこない恐れを考えると、全文を写真撮影する必要があるな。（実際に、戦後、下見会に現れたあと、遙として行方を絶つてしまつた伊能中図がある）

いっぽう、判読不能の部分がたくさんあつては話にならない。誰かに、大阪の下見会へ出かけて読んでもらうか。また、我々が話しても無理だが、新聞記者から話せば、下見の前に写真を撮らせるかも知れないな、などと思いをめぐらせる。

### 産経新聞が現れる

いろいろ考えているところへ、産経新聞の伊藤記者が現れて、伊能忠敬銅像建立記念歩測大会のことを記事にしたいという。聞いてみると、昨年の「アメリカ伊能大図発見」の記者発表のとき、産経新聞の第一面で、上から下までぶち抜きのカラー版の記事を書いた記者のこと。忠敬にたいする深い想いを感じた。

歩測大会のことは、産経新聞「東京版」に、結構大きな記事にしてもらった。ところで、こんな話もあるがと、大阪古書市の新史料につ

いて水を向けると、ぜひやらせて欲しいという。

彼は東京版の担当であるが、新聞社では、特種（とくだね）なら担当にかかわらず、取材できるのである。大阪に行つて事前に写真を撮つてくるという。それなら、編集委員の伊藤さんに全部読んでもらい、伊能陽子さんにも付き合つてもらってコメントを出しましよう、と話しがまとまる。

ここから先は産経新聞の出番だが、新聞記事にするメリットがあるにもかかわらず、出展する古書店から、なかなかすぐ返事がもらえないかつたらしい。数日も時間がかかつていて。

やつと了解がとれて、写真を撮影したのは五月一七日だつた。幹事書店によると、所有する店は前からわかつてたが、今回は百年記念なので、特別に出品してもらつたものとのこと。来歴を聞くと、それを詮索するなら帰つてくれ、といわれたという。

二〇日には編集部として実見し経過を聞いた。二一日に伊藤栄子さん、伊能陽子さんのお一人に集まつてもらい、渡辺代表理事と三人で、率直な意見交換をし、記事にしてもらつた。安藤由紀子さんにも声をかけたが、都合が悪くて出席できず、電話で連絡して参考意見を伝えた。佐原の佐久間達夫さん、伊能忠敬記念館の紺野学芸員にもいろいろと相談した。

### 第二社会面の記事になる

出来上がつた記事はカラーで、五月二五日の産経新聞全国版の第二社会面トップとなつた。関西本社版では忠敬画像を含め、写真二枚にしたと聞いている。

内容的には、ニュース性を重視する社会部の記事だけに、誇張があ

つたり、そんなことを言つたかしら、というようなことがあるかも知れないが、仕方ないと思う。伊能忠敬に少しでも多く世間の関心を呼ぶたしにはなつたろう。

今回売りに出された書簡は三通で、ほかに、大村藩士橋口郁三郎からの伊能図制作依頼に対する断りのメモと、足立重太郎の書簡がセットになつていてる。

入札には記事の影響で、多くの札が入つたが、最低価格が高くて、落札されなかつたという。

## 新史料について話合つた要点

### 勘当差し許し状について

「筆跡は間違いなく忠敬ですね」

「今まで、忠敬の長女・稻は勘当されたといわれてきたが、証拠となる史料はなかつたね」

「この書状は、勘当許し状だから、この前に勘当があつたことは間違いない」

「勘当の時期は、稻が盛右衛門と一緒になつたときではなくて、盛右衛門が商売に失敗したときだつたといふことも、これまでに、わかつてゐるよね」

「借金の後始末をするのを避けるための久離かも知れないね」

「この手紙は、あて先人連印で、勘当を許すように、という書状を忠敬宛に出し、その返事だね」

「この手紙を受取つた方は、あらためて請書を出したはずだ」

「久離とあるが、お稻は離縁した盛右衛門の後を追つたのだから久離で、勘当と少し意味は違うはずだ」

「後半では勘当といつてある」

「久離や勘当をした場合は、寺に届けて宗門人別帳から除いてもらわなければならぬ。観福寺に昔の宗門人別帳はないのだろうか」

「よくない手紙は捨てられて残らないものだが、よく残つていたね」「それにして、どこから流れ出たのだろう。永沢家だろうか」

「伊能家にも最初の手紙や請書があつてもいいとおもうが」

「そういうものは伊能家ではない」

「さて先は右が上席か、左が上席か、まず受取つたのはだれだろう」

### 地図制作依頼についてのメモ

「筆跡はどうですか」

「忠敬さん、少しくたびれているが、自筆じゃないですか」

「書き方に元気がないね」

「自筆として、これは手紙ではないね」

「下書きかメモだろう」

「自筆とすると、地図仕立てを頼まれて、その金額ではいくら頼まれても出来ない、と価格交渉をしている手紙は珍しい」

「依頼した側の記録は、島原や平戸に残つてゐるが」

「この手紙で、唐津藩に地図が渡されたことは、はつきりするね」

「現在は不明だ」

「制作謝礼を貰つても、画工などに払わねばならないから、この値段ではできなかつたのだろう」

【参考】

久離(きゅうり)と勘当(かんどう)について



別に久離、旧里と書く場合もある。目上の者が債務負担などによる刑事上の達帯責任や、社会的非難を免れるため、目下の者に親族關係の断絶を言い渡す行為で、主に欠落や出奔した家出人に対してなされた。奉行所に願い出て久離帳にのると、登録人は相続権を失つた。また勘当は懲戒のために親が子を家から追放することで、しばしば混同される。古い時代では主君、師匠、親が家来、門弟、子に対してその關係を絶つ事であったが、特に親子の絶縁をさせことが多い。勘当により親子關係は絶たれるから、子は財産の相続権を失う。

久離願いは領主か地頭または代官が受理し、人別帳から外される。願書にはすべて名主の加判が必要であった。

しかし久離も勘当も当人が改心して、親の心にかなう様になつた時、また後難のおそれの無くなつた場合は差し免された。差免願書は必ず連体保証人（村方なら、三役、五人組頭、親戚縁者等）の連印により、念書を添える様な形で、連印者の責任において他へは迷惑をかけないから、御免しを願いたいという様な文面により提出される。

人別帳は江戸時代の人別改めの帳簿である。人口調査のため徳川吉宗によって始められた。その後あわせてキリスト教禁止政策に基づき、住民の宗旨を調べるために宗門人別帳が作られた。

(伊藤)

(注) この書状の原文と訳文の会報掲載について、現時点までには、残念ながら所有者の許可が得られませんでした。今後の課題といたします。

書き残した天体観測書がこのほど発見された。前佐渡博物館長で郷土史家の本間寅雄さんは「忠敬が宿泊先で書いた書は確認されておらず、貴重な発見」と話している。忠敬は一八〇三年八月、第四次測量で佐渡入り。同二十九日に、沢根町の回船問屋「浜田家」に宿泊したこと、が忠敬の日記には記されている。

## 伊能忠敬の天体観測書 「一夜の親交」二百年経て発見

宿泊先の子孫宅から

包み紙には「享和三年癸亥八月廿九日 伊能勘解由」と筆書きされている。観測書には「地球周一万一百五十二里 地全径三千二百三十四里」など地球の大きさがほぼ正確に記述されている。また、太陽や月、当時知られていた五惑星の直径と地球からの距離も記されている。当時浜田屋を取り仕切っていた笛井秀山は知識欲旺盛で、境遇の似た忠敬と話しが合つたと、本間さんの推測。最先端の知識を得ようとし、秀山に、忠敬が書き残したとみられる。本間さんは「一夜の親交が生んだ貴重な歴史財産」と話している。

\*本間寅雄さんからお礼のお手紙を頂きました。

【新潟県・垣見壯一氏より】



佐和田宿泊先の子孫宅

から

## 今年度第一回例会および総会報告

六月八日は日ざしがまぶしい。富岡八幡宮の講演会には一般公募の参加者八十名に会員のみなさんで盛況だった。

富岡八幡宮・桜井権宮司の開会挨拶から始まり、渡辺代表の演題は「忠敬と富岡八幡宮」。八幡さまとの結びつきについての講演。ついで佐久間理事の「忠敬の江戸日記より」との講演にすすむ。忠敬と江戸深川とのかかわりについて熱心に話された。その後の質疑応答には伊能洋氏が加わり、忠敬さん、地図作成、測量方法、子孫としての伊能家の日常などから最近のトピックスまで興味深い話題が会場に溢れた。

渡辺代表の講演は忠敬略伝から始まり、江戸出府の動機、曆学者との交わり、周囲の人々から観測所の整備、緯度一度の距離が話題、蝦夷地測量の経緯に及ぶ。ここ富岡八幡宮との親しい関係は忠敬の寺社に丁寧、人事をつくして天命を待つことや、その好奇心は門前まで測量して拝観したことにも表れている。さらに忠敬に対する想いとして「第一歩を踏み出す勇気」「好奇心」「中途半端なことはしない」「運のよい人」など紹介された。

佐久間氏は掲示資料として「佐原から江戸への河川絵図」（利根川・江戸川・小名木川）、佐原村の絵図・田畠図、江戸黒江町・亀島町付近の下絵図、江戸府内測量経路図など展示された。「伊能忠敬の江戸日記を読む」という講演は江戸日記からみた忠敬をご自身で製作された史料に基づき詳細に説明された。佐久間氏ならではの貴重な史料なので後記に収録しておく。また第一回江戸府内測量経路図の写しも公開。



渡辺氏の講演：忠敬と富岡八幡宮



佐久間氏の講演：忠敬と江戸日記



懇親会はにぎやかに、なごやかに



新史料で活躍のサンケイ新聞伊藤記者(右)

佐久間氏の「忠敬の人間像」が浮かびあがっていた。

研究会総会には五十名近くの会員みなさんのご参加をいただき、斎藤議長のもとに、渡辺代表から「前年度経過報告」および「前年度収支計算報告」があり、全会一致で承認された。

その後は会場を移し、会員各位と報道関係者などが参加され懇親会が開かれた。前田さんの司会で、遠来の盛岡・渡部さん、長崎の河島さんの近況報告を始めにみなさんの元気な挨拶が続いた。忠敬文書発見の話題に、映画「子午線の夢」主題歌「夢の涯て」も流れ、久々の再会に親しく会話がはずんだ。

(編集部、写真・伊能洋)

## 伊能忠敬研究会・2001年度経過報告

い、大図の借用内諾をいただいた。

1 会報 25 26 27 28号を発行。編集、入力、版下作成を編集委員みずから行うこととして、経費の節約をはかり、会報64頁建てを実現した。

2 5月3日武藏野市で、日本ウォーキング協会(JWA)、国土地理院関東地方測量部と共に第2回全日本歩測大会を開催。役員として約20名参加。

3 6月18日～22日、渡辺代表が3月にアメリカ議会図書館で発見した伊能大図の学術調査を実施。日本国際地図学会、日本地図センター、伊能忠敬研究会の共同作業としておこなった。結果は、記者会見して発表し、会報でも紹介、インターネット公開もおこなつた。

4 8月26日研究会例会を学士会館で開催。約60名参加。鈴木純子会員よりアメリカ大図調査報告。西川治会員が「伊能忠敬顕彰史」について講演。あと懇談会。

5 伊能忠敬銅像の建立事業に参画した。総応募金額22,591,600円(富岡八幡宮の御寄付100万円を含む)のうち、伊能研の応募は108名、1,094,000円だった。第一回実行委員会の開催が3月15日で、約七ヶ月後の10月20日には除幕式を挙行することができた。素晴らしいまとまりだった。

6 制作は彫刻家・酒井道久氏。監修は伊能洋理事。渡辺代表理事は委員兼事務局長として参加し事業の推進につとめた。伊能研は報告書の作成を担当した。

01年12月、渡辺代表は国土地理院、マスコミと内談のうえ、アメリカ大図展示会案を作つて、アメリカ議会図書館と交渉をおこな

7 日本テレビ「知つてゐるつもり」で伊能忠敬が企画され、アメリカ大図借用交渉と併行して現地ロケをおこなつた。映像は02年1月27日に放映され、視聴率12・1%をマークした。

8 02年3月12日「アメリカ大図展実行委員会」第一回会合が開催された。国土地理院長、全測連会長、日調連会長、日測協会長、JWA会長、地図センター理事長、伊能研代表、共同通信社社長、中日新聞社社長等が委員となり、大竹地図センター理事長(元国土地理院長)が委員会の会長に、伊能研渡辺代表が事務局長に選任された。実行部隊として幹事会が設けられ、事務局長が統括するところになった。

展示会は博物館展とフロア展からなり、博物館展は03年秋以降、東京、札幌、名古屋、大阪、福岡で順次開催の予定。フロア展は検討中。

9 日本テレビの「NNNドキュメント02」で伊能忠敬を現在撮影中。一貫して協力している。放映は9月1日の予定(深夜〇時台)。ドラマが一切ないドキュメント番組である。北海道部分を一部道内で放映したが、瞬間視聴率19%であったと報告を受けている。

10 武揚堂から伊能忠敬銅像原寸版が発売された。監修・日本国際地図学会、伊能忠敬研究会、清水、渡辺、長岡の各会員が四年間つきあつた。大谷著書につぐ大出版である。

11 九州支部の村井、熊谷、石川の諸氏は協力して、広く関係者に呼びかけ、実行委員会を組織して、01年9月26日、九州の伊能測量始発点、小倉常磐橋脇に記念碑を設置した。この記念碑には、現在北九州市役所屋上にある一級基準点が移設される。

\*六月八日の総会報告です。(事務局)

伊能大図に彩り再び 米で発見、模写207枚の1枚  
子孫の洋画家監修「将来並べて列島に」

〔5月8日朝日新聞都内版記事から〕

伊能忠敬の子孫で洋画家の伊能洋さんがこのほど、簡略化した模写で残っていた「伊能大図」(縮尺三万六千分の1)の一枚を彩色し、完成させた。七月に全国測量技術大会で一般公開される。

彩色したのは昨春、米国ワシントンの議会図書館で発見された207枚の中の1枚。全214枚のうち、これまで未発見だった約140枚が含まれている貴重な史料だが、伊能図の特色である美しい彩色をほとんど省略したものが全体の八割を占めている。

今回公開するのはこのうち、渡辺一郎代表らが電子データで持ち帰った四枚だが、そのうちの一枚で広島周辺を描いたものが未彩色だった。「精密さはともかく、絵図としては物足りない」(伊能さん)ので、国土地理院からの委託を受けて彩色することにした。

「日本画家のタマゴ」の浅井ふみさんが担当した。世田谷区にある伊能さんのアトリエで、プリントアウトした縦1・8メートル、横1メートルの地図をパネルに張り、水彩絵の具で海や川の青色、海岸線の黄色、山の緑色をのせた。議会図書館所蔵の大図は彩色が大ざっぱなので、国内にある写本を参考にした。

この写本は製作者、年代、米国にわたつた経緯などは分かっていない。簡略化の度合いからして相当急いだ作業であることは確かで、旧陸軍が地図作成の参考資料に写したという説が有力だ。浅井さんは「安芸諸島を写していたら、参考にした地図より島が一つ足りないなど海岸線の形が微妙に違つた」という。

現在、米議会図書館は大図207枚の貸し出しに備えて、電子デー

タ化を進めている。日本側でも国土地理院が中心になって展示会の実行委員会が三月にできており、秋には電子データが到着する見込みだ。

実行委員会は大図の複製をすべて彩色し、つなげて床に並べる案も検討している。60枚×30枚の広さがあれば、日本列島の形ができる。

「大きな体育館なら可能。ぜひやってみたい」と渡辺代表は話している。

### ○特別展示「伊能大図『米国』展」が開かれる

測量・設計システム展(全国測量技術大会)2002が東京お台場・ビックサイトで七月三日から五日まで開かれた。今回特別展示として、いわゆる「アメリカ大図」の一部が公開された。

伊能大図から現代へ・地図と測量機器で見る変遷として

#### ① 200年前の地図および測量機材 ② 100年前の地図および測量機材

#### ③ 現在の地図および測量機材

などが時代を追つて展示。伊能大図は北海道勇払付近、浜名湖付近、大阪及び奈良付近、広島と安芸諸島付近の四枚で、三万六千分の一の大パネルになつていて。併せて明治初期と現在の地図が並べられており、時代の変遷がひとめで分るようにしてある。東京は六千分の一の江戸府内図に、二千分の一で明治十年と平成十年の東京中心部で比較されている。

この伊能図は伊能洋氏が彩色を担当された。

二三百年前の測量機材として杖方位盤、梵天、半円方位盤、量程車、渾天儀、間繩などを現物で紹介。最新技術では全地球測位システム(GPS)連動の測量機器や地理情報システム(GIS)関連ソフトが展示された。

萬物流転  
一理貫行

安倍能成—あべ よしげ—（一八八三—一九六六）

いかニキミ

五月十六日

うきものはむ

一種見る

あべ能成

大正・昭和期の教育者・哲学者。東大在学中、オイケンに学びカント哲学を研究。野上豊一郎・小宮豊隆らとともに夏目漱石の門下。慶大・女子英学塾などの教師を歴任。この間、哲学書の翻訳や、「西洋古代中世哲学史」、「西洋近世哲学史」などを著す。ヨーロッパ留学。帰国後京城帝大教授・法文学部長、一高校長となり戦後にいたる。一九四六年文相となり、ついで帝室博物館総長。學習院長となり、没時まで私立としての學習院の經營に貢献。自由主義的知識人による平和問題談話会結成に際し発起人となり以後平和憲法擁護・全面講和を主張、平和運動の発展に尽くした。エッセイスト、能楽の保護育成者としても知られる。

（三省堂コンサンス人名辞典）

「多分僕が、安倍先生に面接をして頂いた最後だったと思うよ」と研究会会員・斎藤仁先生の思い出では、想像よりも優しい印象だったとのこと。厳しい方といわれた安倍先生の前で、こちこちに緊張していた若き日の斎藤センセイの姿も微笑ましい限り。

學習院所蔵の伊能図も活躍した江戸東京博物館での「伊能忠敬展」、兄・伊能敬の高校以来の友人小倉芳彦前学長のご協力など、芳名録にご署名くださった安倍先生にとつては全く関係のない事柄ながら、私にとつてはこの一頁からもう縁の糸を感じてしまうのである。

（伊能陽子）

## 近代での伊能図の働き—軍管区図—

清水 靖夫

今まで、明治維新以後の幾つかの伊能図の働きについて調べてきましたが、その具体的な類例について、触れてみたい。

明治維新後、旧幕府勢力の一部には、薩長土肥による維新政府の行き方に対する不満などから、武力蜂起による小競り合いが、日本各地で起つていた。その中で最も大規模な、最終の武力抗争は明治十（一八七七）年の西南戦争であった。表向きこれによつて旧勢力との決別が済んだ形となる。

明治維新以後、幾つかの地図測量・地図調製機関が政府部内に誕生し、分離統合を繰り返していた。ここでは、陸軍系の地図作成の一つを取り上げてみた。

『陸地測量部沿革誌』の明治十年の項に、「西南ノ役起ルヤ第五課ハ急ニ「九州全図」ヲ編輯シ転写石版ニ依リ之ヲ印刷シ以テ軍用ニ資シタノ然レトモ此ノ編輯図ハ未タ其ノ詳ヲ悉サス不便少カラサルヲ以テ六月第六課全員ヲ挙ケテ戰地ニ出張シテ迅速測図ニ従事シ」とある。同誌付図第六図「軍管図」の解説に、「本図ハ明治十一年ヨリ同十二年末ニ涉リ伊能中図ヲ基本トナシ天保図其他ノ図ヲ参照シ第一ヨリ第六ニ至ル軍管毎ニ編纂セルモノニシテ之ヲ其當時軍管図と称シ：當時製版術具備セザルヲ以テ悉皆転写石版法に依リ出版セリ図中人口ノ区分：ハ各鎮台ニ於テ編集調査セル資料ニ依ル」とある。更に、昭和

十八年七月刊の『研究蒐録 地図』の「伊能忠敬先生測量叢話」の「伊能図と我陸海軍」の項目中には、「軍管区図 本図は伊能の中図を基礎とし、明治十一年より十二年末に亘り、陸軍參謀局の第五課に於て、兵要の具に供する為、第一より第六に至る、各軍管毎に、梯尺二十一万六千分一（以曲尺六分換一里）を以てする地図を編纂したもので、経度は、伊能図に據つたから、京都を零度としたものである。」とあり、同一の原資料等に拠つてゐるようである。

「軍管区図」の最初と考えられるのが、西南戦争時の「九州全図」である。この地図は、海陸の輪郭と主要な交通路、平坦地と山地の境界を示すケバを描く。このケバは後年の地形を示すケバと異なり、平坦地と山地との境界付近にケバが一列描かれているだけである。拙藏の「九州全図」は題簽を欠くが、内題もなく、また地図中に説明其他一切書かれていない。

「西海道全図」は「九州全図」と同じ範囲だが、地形を示すケバが詳細となつてゐる。ただし、地形は実際の地形を示すというよりも、山岳地帯を示す程度のものである。また道路網も郵便線路を大きく、他の交通網も詳細に描かれており、地名も遙かに多くなつてゐる。これらの地図の道路網、集落名等の資料の相当部分は幕府の「天保国絵図」に拠つたところが多いようである。また、『陸地測量部沿革誌』中には、「軍管区図」は転写石版と記されているが、「西海道全図」では記事とは異なり、初版が銅版刷で、後刷りが石版刷である。銅版刷りが「西海道全図」のみの事か、あるいは沿革誌作成時には銅版刷りが担当部署では失われてしまつてゐたのかは、今となつては不明である。「西海道全図」にならつて明治十一年以降作成された「軍管区図」

類は、伊能中図の經緯度に拠つており、残されている諸図は転写石版刷りである。勿論、縮尺は何れも二一万六千分一である。

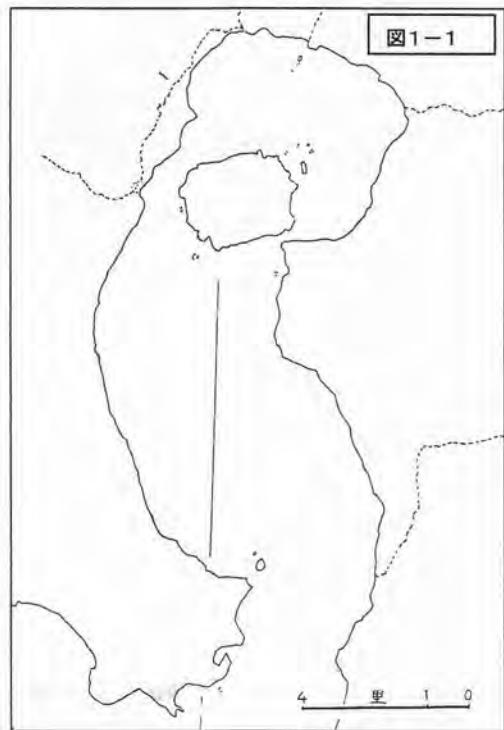
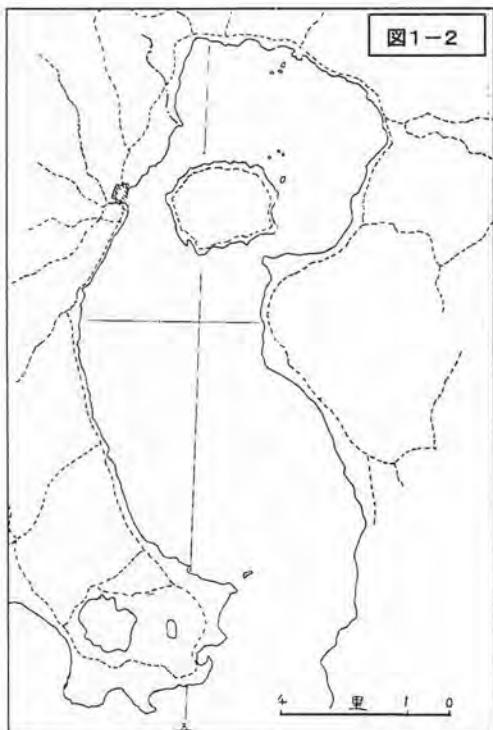
伊能中図とこれら地図を比較のため、鹿児島湾沿岸地域の海岸線と主要交通路を抜き出してみたが、勿論伊能中図には海岸に平行する道路は測量されていない。南端の池田湖と鰐池は伊能図には描かれておらず、九州全図、西海道全図とともに形は異なっている。

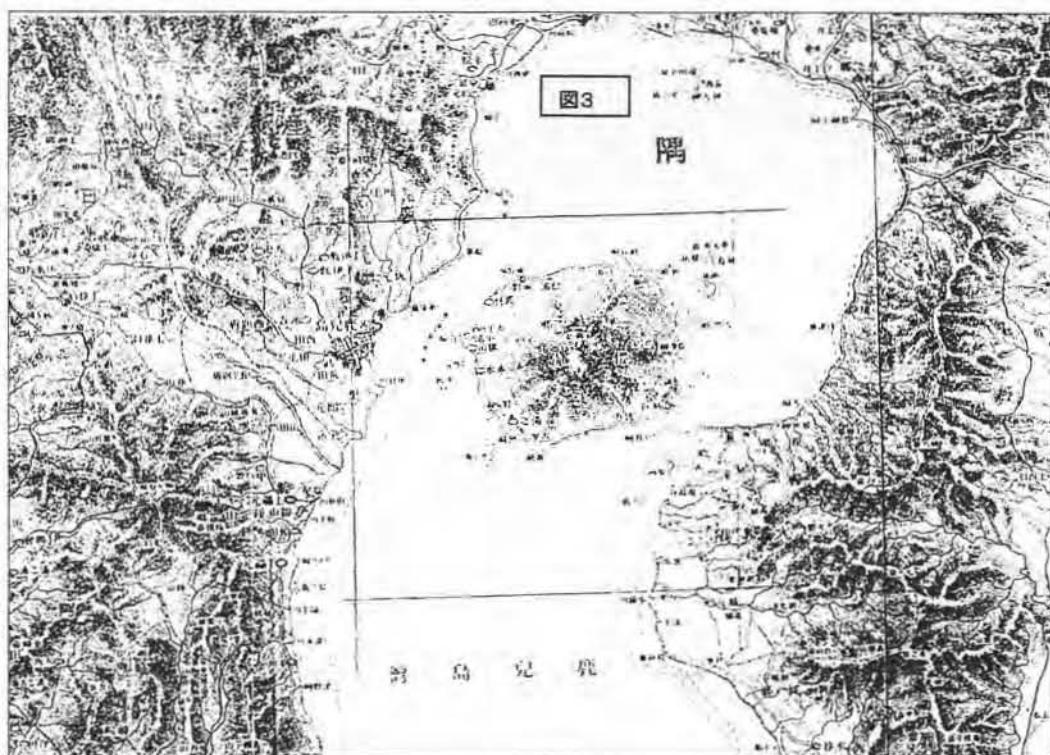
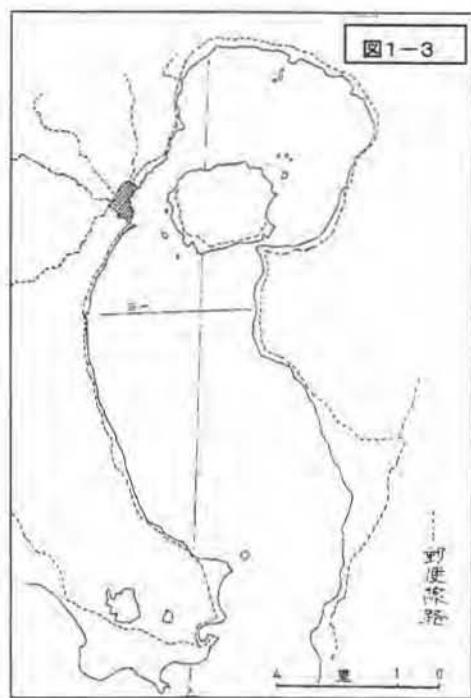
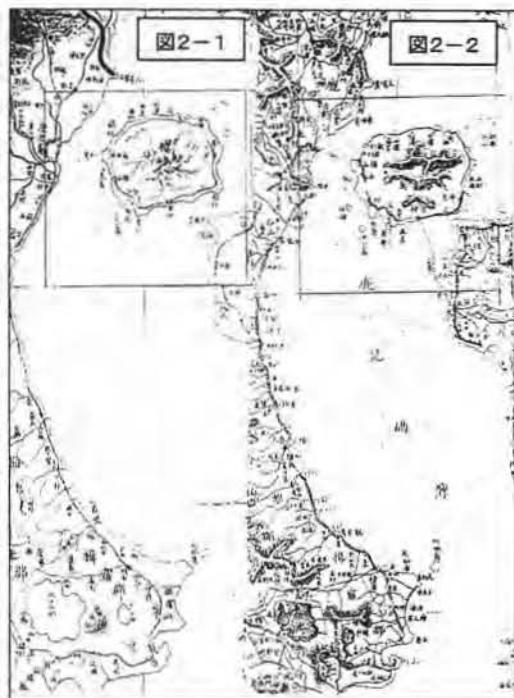
伊能図の西五度の子午線はここに受け継がれているが、九州の中央部を貫通していながら、垂直には描かれず、伊能中図と同じく斜め方向になつていているのも、伊能図をそのままなぞつた為と思われる。多少の海岸線等の異同はあるが、描画誤差の程度と言えようか。

比較のため、「複製二十万分一図鹿児島」を掲載しておく。海岸線は「九州全図」「西海道全図」とほぼ同じだが、地形情報は全く別の資料に拠つてていることが判る。

以上の諸図のほかに西南戦争時に迅速測図として五万二千五百分の一の「鹿児島県実測図」他があるが、海岸線等は全く別である。

- |       |          |      |      |
|-------|----------|------|------|
| 図 1-1 | 伊能中図     | 海岸線等 | 縮小   |
| 図 1-2 | 九州全図     | 海岸線等 | 縮小   |
| 図 1-3 | 西海道全図    | 海岸線等 | 縮小   |
| 図 2-1 | 九州全図     | 桜島部分 |      |
| 図 2-2 | 西海道全図    | 桜島部分 |      |
| 図 3   | 複製二十万分一図 | 鹿児島  | 桜島部分 |





# 『官版実測日本地図』論考 (三)

—その編纂過程と図の内容・種類—

高木 崇世芝

## 九 官版実測録の出版

『官版大日本沿海実測録』(以下、官版実測録と略称する)が明治三年(一八七〇)の出版であることは、同書の見返に明記されていることから判明する。この官版実測録の原本が現存するのでそれから記述してみたい。原本は国立公文書館(内閣文庫)に所蔵され、それも三部あるのである。

①題簽『奥地実測録』 表紙黄色紙装 全十四冊

序目一冊と卷一から卷十三までの十三冊から成り、表紙の寸法は縦二六・八cm、横一八・〇cmの美濃版である。

\*「秘閣図書之章」「日本政府図書」の二つの蔵書印がある。

\*「地図接成便覧」(青・緑の彩色あり)を添付する。

＊序目の一冊に次の文がある。

○大日本沿海奥地全図序 文政四年夏六月

御書物奉行兼天文方 高橋景保謹識

○大日本沿海奥地全図序 文政四年夏六月 伊能忠敬謹識

○大日本沿海奥地全図凡例 伊能忠敬謹識

○識語(文化元年云々の文) 高橋景保又謹

○奥地実測録総目(卷一から卷十三までの総目次)

②題簽『奥地実測録』 表紙黄色紙装 全十四冊

\*「昌平坂学問所」「大学藏書」「日本政府図書」の三つの蔵書印がある。

③題簽『奥地実測録』 表紙黄色紙装 全十四冊

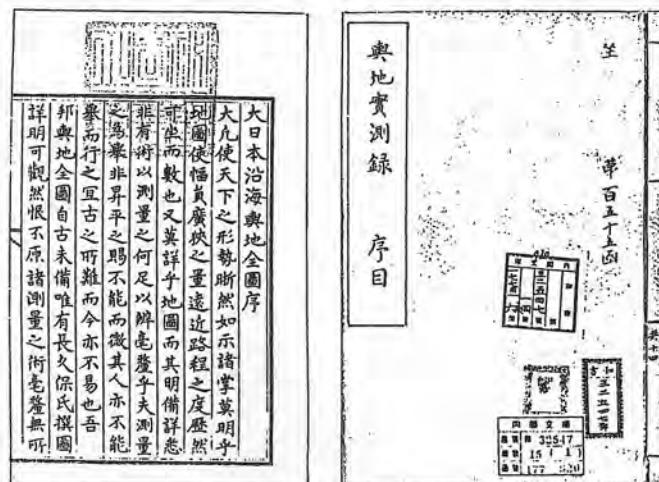
\*「地誌備用図籍之記」「図書局文庫」「日本政府図書」の三つの蔵書印がある。

以上、三部共に表紙装、野紙、文字、記載方法、冊数など全て同一である。これは、同時期に同じ人物によつて書き記されたものと考へて間違あるまい。その文字は全て秀麗な楷書で書かれている。なお「地図接成便覧」は①にのみ添付される。この書物がどのような経過で現存するのかは福井保氏の論考に詳しい(注20)。福井氏は『御書物方日記』文政四年十一月十二日の条に、伊能図と共に「奥地実測録十四冊箱入」とあることと紹介している。

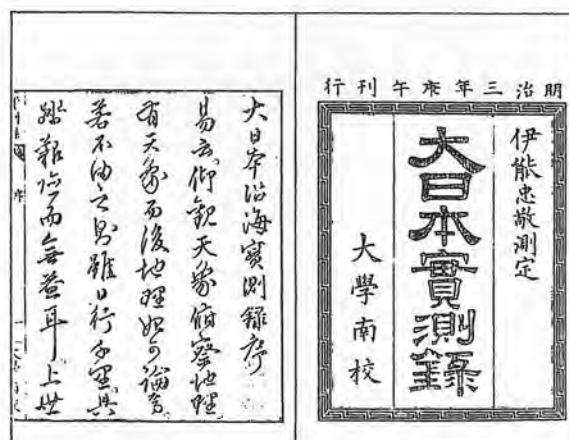
そして、その一つは伊能図と共に正本として紅葉山文庫に収蔵されたものとし、二つ目は昌平坂学問所へ献上したものか、といわれる。しかし、三つ目については言及されていない。この三つ目について筆者は、明治六年、皇居において伊能図正本が焼失した後、伊能家より副本の献上があり、それに付随して献上されたものと考えるがどうであろうか。

いずれにしても伊能図は正本、副本ともに焼失しながら、この『奥地実測録』のみは、焼失を免れ三部共に今日まで伝わっているのである。

さて官版実測録であるが、これは美濃版・木版摺・全十四冊であり表紙は黒色である（官版実測図・五版の表紙と同用紙）。首巻一冊の見返には横書きで「明治三年庚午刊行」とあり、「伊能忠敬測定／大日本実測録／大学南校」と記載される。序や凡例は『輿地実測録』のそれと全く同文であるが、凡例の記号に一つ変更が見られる。新たに松平慶永（号春嶽）の序文と大学南校・伊藤明徳の附言が追加される。



輿地実測録・序目 文政四年序



官版大日本沿海実測録 明治三年刊

卷一から卷十三までの十三冊は、全国の測定データを記載したものであるが、当然ながら、江戸は東京に、蝦夷は北海道に、松前は渡島国津輕郡という風に、修正されている。附言を読むと「官版実測録を編集するために使用した写本は、誤写があつたり虫食いがあつたりして文字が抜けている個所がある。したがつてその部分は疑問があるのを黒くしておく。他日、善本を得たら校正したい」と記している。

これは実に不思議なことである。当時の新政府には、献上された原本は少なくとも二部はあり、その一部には「大学蔵書」の蔵書印がある。この大学は明治二年六月に開設された「大学校」であり（注21）、開成学校・大学南校を管轄した行政機関であることは先に記したとお

りである。そこに保存されていた『輿地実測録』原本を使用せず、誤写の多い写本を使ったとある。出版された官版実測録・全四冊を調べると確かにそのような部分がある。それは卷五、卷六、卷七、卷十の四冊、計十七個所にわたる。この写本使用によって起きた脱字については、古くには、河田耀氏(注22)が、最近では福井保氏

(注23)が言及している。

## 一〇 まとめ

長々と記述してきたが、最後にまとめとして、官版実測図の評価を考えてみたい。

官版実測図が、地図史上で意外と低い評価しか与えられていないことは、はじめに述べたとおりである。

従来から評価を得ていた伊能図が、近年になつてさらに詳細な研究がすすみ、いつそう高い評価を得るようになったことは喜ばしいことである。その伊能図を基本とした官版実測図が、伊能図から削除されているのは、方位線だけのはずである。正確な沿岸線や街道筋も、そして詳しい地名もそのままである。それどころか、伊能図になかつた小笠原諸島も琉球諸島も追加され、空白部分の多かつた蝦夷地内陸の地形は他図から転用して埋められ、カラフト島図までもが、苦心の末に新しく追加されたのである。すなわち、当時、日本で作製されたいかなる日本全図と比較しても、最も正確な日本全図であったはずである。伊能図が美しく華やかであること、大名家などにのみ転写された特別の図であったことと、官版実測図が地味な木版図であること、一般に広く販売されたこと等は、地図そのものの正確さとは関係ないはずである。官版実測図と伊能図を比較してどうこうでなく、正確な日

本全図かどうかで判断すべき問題なのである。

そういう観点から見て、官版実測図は、幕末の最高峰に達した日本全図であつたと筆者は考えている。それは、文化年間に幕府が編纂し銅版で出版した『新訂万国全図』(天文方・高橋景保等の編纂)と同様に高い評価を与えてよいはずである。

開国によつて諸外国との対応を余儀なくされた幕府にとって、正確な日本全図の出版は急務であった。そのため、外交上、問題の生じない国境確定(特にカラフト島において)と地形の正確さが要求され、関係者が心血を注いだであろうことは、関係文書の行間から読み取ることができる。だからこそ、出版以来優れた日本図として版を重ね、広く普及したものと思われる所以である。

伊能図が明治に入つてから、国の基本地図の作製に大きく寄与したことは、研究によつて明らかにされている。その時、官版実測図が使用されることとなかつたのであるうか。具体的な使用例があつたら、ぜひ知りたいものである。

当時、識者たちは、官版実測図の出版をどう考えたのであらうか、何か記録されたものはないのであらうか。また、新しく開校していく全国の小学校や各種教育機関でも、数多く使用されたのではないかと推測するのであるがどうであろうか。

## 一一 余録

ここでは関連する幾つかについて書いてみたい。

① P・ムリエの官版実測図の模写図

元治元年(一八六四)七月、来日したお雇いフランス人、P・ムリエは、精力的に活動を開始した。その一は気象観測を実施して詳細な調

査報告書を作成したこと。二は日本資料として地図や書籍などを多数収集したこと。三は日本の養蚕技術の紹介者として貢献したことであるという。そのムリエが、出版されたばかりの官板実測図を入手し、その中の第一・東日本図と第二・西日本図の二枚を一枚の大きな日本図として模写したのである。その図は絹布に筆で描かれ、全体の大きさは縦三三四cm、横二八九cmである。地図は黒一色で描かれ、地名と記号は赤・黒二色で記入された。地名は全てフランス語で書かれ、その殆どがほぼ正確に音訳されているという。模写の時期は、慶応三年で、図中に「1867年3月31日、横浜」とあり、ムリエの署名がある。この模写図は直ちに本国へ送られ、現在はパリ国立図書館地図室に所蔵されている(注24)。

②川上寛著『大日本地図』の出版

川上寛(号冬崖)は、蕃書調所に勤務し絵図調役となつた後、西洋画法の研究をすすめ、後進の指導にもあたり、近代洋画の先覚者の一人となつた人物である。明治維新の後、開成学校・大学南校でも勤務し、明治九年、陸軍省参謀局に転じ、我が国の地図作製にあつた。

その川上寛が明治四年に出版したのが『大日本地図』である。大きさは、縦一五五・三cm、横一四〇・三cmで、木版彩色摺である。

この図には、次のような解説文がある。

曩時伊能忠敬実測図ヲ製シ大中小ノ三種アリ、而シテ其小図ノ旧

版幾ント既ニ漫滅ニ属セリ、因テ今其旧小図ニ拠テ更ニ縮小シテ

此図ヲ作り、且ツ己巳改正ノ陸羽ノ区分ヲ詳カニシ、又別ニ北海道州郡分界図ヲ附シ、之ヲ官刻シテ実測録ニ并セ世ニ公行スト云爾。明治四年十二月 川上寛誌

これによつて、本図が官板実測図と関連があることが判明する。

③初版図の二種

○東京都の三井文庫に所蔵される初版図(薄茶色絹装)には、四枚共に小型朱印「開成所刊行」はなく、たんに「開成所」の朱印が捺されている。



6.2×3.0 (cm)

表紙の隅には「慶応元年」と記した小紙片が貼られ、図中には「渡辺質所持」の墨書きがある。この朱印「開成所」は、櫻井豪人氏によれば、開成所の蔵書印だという。とすれば、この図は、元は開成所の所蔵であり、たいへん貴重なものといつてよいであろう。三井文庫の担当者に尋ねたが、木箱はないということであつた。また、渡辺質なる者については、筆者には判らずじまいであつた。

○札幌市・個人所蔵図は初版(薄茶色絹装)であるが、捺されている朱印は次のようになつてゐる。

第一・東日本図 大型朱印 「開成所刊行」  
 第二・西日本図 小型朱印 「開成所刊行」  
 第三・蝦夷諸島図 大型朱印 「開成所刊行」  
 第四・北蝦夷図 小型朱印 「開成所刊行」

これは一体どうしたことであろうか。筆者が今まで調査できた初版図は五部であるが、いずれも小型朱印を捺す図ばかりで、このような図は初めてである。表紙・地図共に同じような保存状態であり、後に表紙だけを入れ替えたとは思われない。

④大学南校・三版の一種

江別市にある北海道立図書館に、大学南校版の三版(表紙青藍色布装)が所蔵される。その中の第四・北蝦夷図に「開拓使図書記」「札幌県図書印」「北海道庁図書之印」という蔵書印が捺されていて、北海道における行政官庁の変遷そのままの興味深いものである。この図には、さらに「大学南校」(縦横七・一cmの方形)と「南校図書消印之証」という二つの朱印が捺されている。これと同じ朱印を捺した図は外に実見したことはない。

注記

- 注 20 『江戸幕府編纂物・解説編』による  
注 21 「内閣文庫小史」による  
注 22 「本邦地図考(三)」による  
注 23 『江戸幕府編纂物・解説編』による  
注 24 この項目は全て、ドベルグ美那子氏の「P・ムリエの日本地図手写本」という論文によった
- 本稿の執筆にあたっては多くの文献を参照した。  
ここに発行順にあげておきたい。
- 【参考文献】
- 『権太概観』(写本)
  - 『本邦地図考(三)』 河田雅 史学雑誌六一七 明治二八年七月
  - 『徳川幕府時代書籍考』 牧野善兵衛
  - 『大日本古文書・幕末外国関係文書之八』 東京帝国大学史料編纂掛 大正五年三月
  - 『日本総図の沿革 蘆田伊人 国史回顧会紀要二』 昭和五年四月
  - 『江戸時代刊行の古地図 栗田元次 史学研究三一三』 昭和七年一〇月
  - 『日本地図史』 秋岡武次郎 昭和三〇年一〇月 河出書房
  - 内閣文庫小史 福井保 『内閣文庫国書分類目録・下』 昭和三六年一一月 内閣文庫
  - 『近世藩校に於ける出版書の研究』 笠井助治 昭和三七年三月 吉川弘文館
  - 伊能忠敬作成の日本諸地図の現存するものの若干 秋岡武次郎 地学雑誌七六一六 昭和四二年一二月
  - 『伊能忠敬の科学的業績』 保柳陸美編 昭和四九年一一月 古今書院
  - 『江戸時代・日本絵図並万国全図集成』 岩田豊樹解説 昭和五〇年八月 人文社
  - 伊能図 山本武夫 『国史大辞典(一)』 昭和五四年三月 吉川弘文館
  - 『字彫り版木師・木村嘉平とその刻本』 木村嘉平 昭和五五年九月 青裳堂書店
  - 幕末維新の書林目録(元) 篠吉光長編 日本古書通信四五〇号 昭和五六年一〇月 日本古書通信社
  - 『幕末教育史の研究(一)』 倉沢剛 昭和五八年二月 吉川弘文館
  - 『江戸幕府編纂物・解説編』 福井保 昭和五八年一二月 吉川弘文館
  - 『洋学史事典』 日蘭学会編 昭和五九年九月 雄山閣出版
  - 『江戸幕府刊行物』 福井保 昭和六〇年八月 雄山閣出版

○P・ムリエの日本地図手写本 ドベルグ美那子

昭和六二年四月 『日本洋学史の研究Ⅷ』 創元社

○『英国にあつた伊能忠敬の日本全図』 渡辺一郎編

平成七年五月 日本国際地図学会

○最近における伊能日本図の所在と概況について

渡辺一郎 地図三四一―二 平成八年六月

平成一〇年三月

○『忠敬と伊能図』 伊能忠敬研究会編

アワ・プラニング

○伊能図総目録 渡辺一郎 『伊能図に学ぶ』

平成一〇年七月 朝倉書店

○「開成所刊行」の朱印と開成所刊行物 櫻井豪人

汲古三五号 平成一一年六月 汲古書院

○『最終上呈版伊能図集成』 鈴木純子・渡辺一郎編

平成一一年九月 柏書房

B5版102頁の論集。大谷さんからです。

・シーボルト事件の背景と間宮林蔵「林蔵は密告していない」

・間宮林蔵の祖「番匠、間宮隼人」は伊奈関東郡代の

小貝川流域開発に協力するため横浜領から移住した

・検地帳、古地図からその足どりを解明

・間宮林蔵の生年月日を明記した文書の発見

・間宮林蔵著「北蝦夷分界余話」と

・「北蝦夷島地図凡例附里程記」草稿を発見

・林蔵の「カラフト図、蝦夷図」はなぜ先輩、上司の名で発表されたのか その謎に迫り真相を解明する

## 資料紹介 「間宮林蔵の再発見」間宮林蔵顕彰会編



編集部注 本稿は官版実測日本図に関する論考としては、最初にまとったものではないかと思います。ご労苦に御礼を！

—完—

\*間宮林蔵顕彰会役員の金本勝三郎さんが入会されました。

## 忠敬と間宮林藏

(一)

安藤由紀子

## 二人の年譜

筑波郡上平柳村(現在伊奈町上平柳)の小貝川のほとりに、間宮林藏のまことに小さなみすぼらしい墓が立っている。墓と木々を通して小貝川のとうとうたる流れが見える。河岸から大分入ったところに、貧しい生家の復元したもの、小さいが立派な記念館と銅像が建っている。彼の生家は小農で籠やを副業としていたという。

青年時代までの資料は何も残っていないが、逸話は多い。「土着した武士の子孫であった」「筑波山中の洞窟で手のひらにろうそくを立て燃え切るまで立身を祈願した」「算学の師は豪農の海老原庄右衛門が、菩提寺の伯栄和尚だろう」「岡堰の修築にきた幕府の役人を数学の学力で驚かし、江戸へ出るきっかけをつかむ」等:これらは後年の間宮像に矛盾することがないから言い伝えられてきたので、すべて真実というわけにはいかないだろう。

数理にたけていたこと、測量家であり房総近辺を巡回していた村上島之允に見出されて、従者として、寛政の初め頃江戸に出てきたことだけは確かなようだ。

忠敬・林藏関連年譜(林藏の年齢は二説ある内年少の方をとった)

安永九年1780 林藏、現伊奈町の農家に生まれる(1) 忠敬

との年の差三五(算用数字は各自の年齢を示す)

天明一年1781

忠敬本宿組名主拝命(37)

寛政五年1793

ロシア使節レザノフ、根室で通商要求

寛政六年1794

ロシアウルップ島に植民地建設

寛政七年1795

忠敬江戸へ出、高橋至時に入門(51)

寛政十一年1799

林藏、村上島之允の従者として蝦夷地に渡る

(20) 幕府蝦夷を直轄地とする

忠敬第一次測量(蝦夷地)出発(56)

文化十二年1800

忠敬と会う、普請役雇いとなる(21)

享和一年1801

忠敬第二次測量(東北東海岸)

享和二年1802

忠敬第三次測量(東北西海岸)(58)

享和三年1803

忠敬第四次測量(名古屋、福井、佐渡)

文化一年1804

林藏東蝦夷地、南千島の測量に従事(24)

文化二年1805

忠敬第五次測量(紀伊半島、岡山、隠岐)

文化三年1806

林藏蝦夷各地に勤務、測量、植林、作道(26)

文化四年1807

林藏エトロフ沿岸実測新道開発(27)

ロシア、エトロフ島シヤナを襲う「シヤナ事件」林藏主戦派として立ち会う 堀田撰津守蝦夷出張の案内下役 人を介して忠敬から羅針盤を譲り受ける(28)

一月忠敬第六次(四国)出発(64) 林藏第一回力ラフト探検 松田伝十郎と共にラッカまで行く再度の探検を願い出て七月出発、越年する

忠敬第七次(九州)出発 林藏海峡地帯を北上

してナニオーにいたる 土地の酋長と海峡を越え、デレンで清国役人とあう (30)

文化 七年 1810 村上貞助の協力で『東輿地方紀行』『北夷分界余話』『北蝦夷島地図』をつくる 忠敬九州測量中

文化 八年 1811 林藏江戸へ帰り幕府へ著書など報告書提出 松前奉行支配調役下役格に昇進 (32) 五月忠敬九州第一次より帰宅 六月ゴローニン、クナシリで逮捕さる 林藏 (二回目の対面) 忠敬より緯度測定法を学び、十二月蝦夷地へ向かう 忠敬十一月九州第二次へ出発、林藏見送る 忠敬林藏に対し送辞『贈間宮倫宗序』をおくる (67)

文化 九年 1812 林藏、松前監獄で捕虜ゴローニンと会う この頃より林藏、本格的蝦夷測量に専念 (33)

文化十一年 1814 忠敬九州測量おわり、帰宅 (70)

文化十四年 1817 秋、林藏帰府、忠敬宅同居、蝦夷地資料を差し出す (38)

文政 一年 1818 四月忠敬、没 (74) 九月林藏函館へもどる (39)

文政 四年 1821 『伊能図』完成上程

文政 五年 1822 幕府蝦夷地直轄を解く 林藏江戸へ帰る (43)

文政十一年 1828 「シーボルト事件」起る (49)

二人の年譜をすりあわせてみると、三回の傍線を引いた出会いがあり、十八年の重なった人生のうち、これですべてであった。

一回目と二回目の間に「シャナ事件」と「間宮海峡の発見」があり、二回目と三回目の間に「ゴローニン事件」と林藏の本格的な「蝦夷測

量」があった。

第一回目の出会いはどこで、どういうかたちだつたかは、はつきりしない。忠敬の測量日記に一言の言及もない。八年後、二回目の出会いのとき忠敬は、緯度測定法を教え、蝦夷全図完成の期待をもつて林藏を蝦夷へ送り出した。その時与えた、送辞「贈間宮倫宗序」の中で、蝦夷地で師弟の約束を結んだと書いているので、一回目の出会いが確認されるのである。村上嶋之允の従者では、日記に書くほどのインパクトが得られなかつたのであろうか。

### 「シャナ事件」

年譜が示すように、北辺の情況は急を告げていた。ロシア船との接触はしだいに増加し、日本の千島列島の殖民地化は、ロシアに五十年近くの後れをとつていた。

文化四年四月幕府の軍事植民地であつたエトロフ島のシャナにロシア船が襲来し、幕府会所を焼き討ちした。二隻の船は、捕鯨のための露米会社に属し、ロシアの公式な襲撃ではなかつたが、日本軍は戦力に差がありすぎて山の中へ逃げ出すことにきめた。

幕府普請役雇いとして植林、作道のためにここに勤務していた林藏は、「立ち退き」ということにつき自分は相談に預からなかつた。戦うべきだ。退くなら、自分に相談のなかつたことという証文を書け」といきまいたという。常識からはみだして、いかにも林藏らしい言動ではないか。幕府の最高責任者は途中の山中で自殺した。林藏には深い外國への敵意が植え付けられた。この武勇伝が幸いして、林藏はなんのお咎めも受けなかつた。

この年人手を介して忠敬から羅針盤を譲られた林藏は、少しづつま

ともな測量をするようになつてゐたと思われる。

翌文化五年、蝦夷松前奉行所在勤の高橋重賢が、忠敏に送つた年始状を引用しよう。

B五六 高橋重賢書簡 伊能忠敏宛

文化五年正月

世田谷伊能家文書

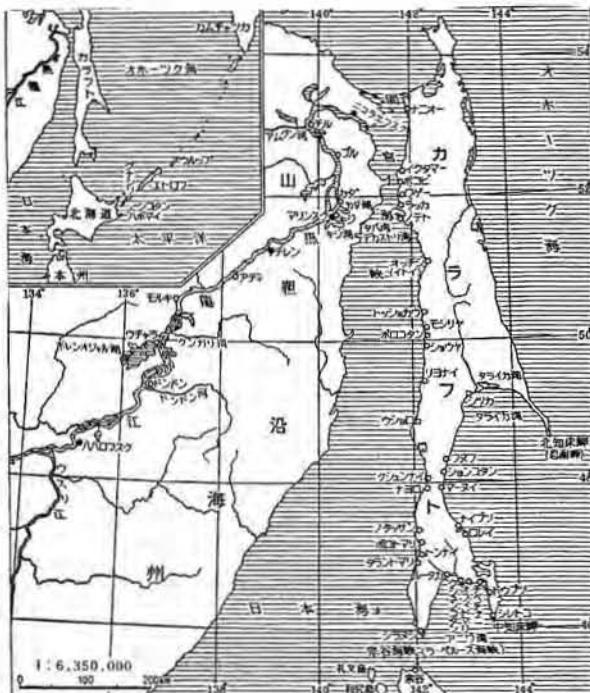
(前略) 右エトロフ乱暴のとき、間宮林藏はおおいに活躍し、同地では彼一人だったということです。現在は私の家に住んで絵図などをしたためおります。ところが江戸よりのご命令で、同人もカラフト探検仰せ付けられ、程なく出発の決心であります。相変らず元氣に根気強く勤務いたし、確かにひとかどの人物であります。

さてあなたも近年の内お下りになつて、地形充分にお仕立て、後世の鏡となされたくお祈りいたしておりますが、その節は林藏などもあなたに属させ働き申したいと考えております。(後略)

### 「間宮海峡の発見」

その年文化五年蝦夷奉行は、林藏に上司松田伝十郎とともにカラフト探検を命じた。

二人は四月、死を覚悟して宗谷を出発した。辛苦のすえカラフト西岸のラツカという川のところまで見渡してみると、大陸が近くに望まれ、間の水道は四里ばかり、それより奥は海幅も広く遠くに黒龍江の河口も望見された。「カラフトはおよそ離島である」と判断した松田はここできりあげて帰ることになった。ついてくる現地人もなかつた。林藏はカラフト北端までの夢を一応断念してシラヌシに帰つた。



カラフトおよび黒竜江下流域図

翌文化六年、氣の強い林藏は再調査を願い出、宗谷に留まる事廿日ばかりで、再び一人カラフトへ出立した。五月十二日前人未到の百マイルを突破して北端に近いナニオーに到達した。黒竜江からの水は一部は南流するが大部分は北流し、このあたりから広くなる海峡の怒涛の中へ消えていった。やがてノテトまで帰ると、幸運にも酋長コーニーが進貢と交易のため黒竜江のデレン満州仮政府へ行くと知り、同行させてもらうことになった。

死を予期してアイヌ人へそれまでの資料を託し、コーニーらと出船した。デレンについた林藏は、漢字で清国の役人ともやりとりが出来た。彼はさまざまの苦しい体験に耐えて十一月、松前に帰着したのである。

文化六年の「間宮海峡の発見」は、国内外できわめてタイムリーな出来事であったといつてよい。日本では、ロシアの南下が最高潮に達し北辺に大きな関心が払われていたときであり、世界では、地図上両極をのぞいて、この地区のみが不明のまま残されていたからである。間宮林蔵の名声は一挙に挙がった。

翌七年林蔵は、指の凍傷のため、嶋之允の息子村上貞助の助力を得て、『東錦地方紀行』や『北蝦夷図説』の口述に当たる一方、カラフト図の作成にも力を注いだ。忠敬に譲られた羅針盤を持っていたはずであるが、まだ緯度の天文測定法を心得ていなかつたので不正確な所が多かつた。

これらの報告書を携えて文化八年正月江戸についた林蔵は、清書して幕府に提出した。幕府は彼に百両の報奨金を与えた。

## 二回目の出会い

この頃忠敬は第一次九州測量からいっただん帰つて江戸で第二次準備のため忙しい六ヶ月を送っていた。その忙しい合間を縫つて、度々尋ねてくる林蔵に緯度の天文測定法を教えた。再び蝦夷に行く事は出来ないと思っていた忠敬は、蝦夷の測り残した部分の測量を大いに林蔵に期待したに違いない。

おなじく文化八年十一月、忠敬は九州第二次測量に出発した。本格的な測量としては彼の最後のものである。林蔵は品川まで、一行を見送つた。

別れに臨んで忠敬は、例の送辞『贈間宮倫宗送序』を書いた。漢文で立派な表装がつけられている。林蔵はこれを忠敬宅に預けっぱなしにしておいたらしい。今忠敬記念館の書庫の中に眠っている。こうい

うものはありがたがらない林蔵の性格がよく分かつて面白い。

忠敬は孫の教育などについても度々林蔵に相談したらしく、旅に出てから娘に宛てた書簡に「三治郎の学問の事ご心配ください。第一に手習い第二に読み物をさせ度、間宮もわたしと同意見です」（文化九年一月）「間宮林蔵、出立後もいろいろお世話をしてくれる由親切なことです」「間宮林蔵助言のとおり悪遊びせず、静かに書物を読むようお育てください」（同三月）などと書いている。

他の消息では、「このひと大晦日に蝦夷出立の事高橋（景保）氏から知らせがありました。故郷へ立ち寄りのためと察しられます」（同二月）「間宮林蔵隱密に出府の由、多分ロシアの一件（ゴローニン事件、次号参照）のためと推察されます」などがある。

林蔵は帰府後しばらく病気だったから、ほんの三、四ヶ月の間に気心の知り合う間柄になつていて。

間宮林蔵は一回目と二回目の間のほぼ十年間は、測量家というより蝦夷御用掛としての冒險家だったといつてよいだろう。彼の蝦夷地の本格的測量は忠敬との二度目の出会い以後、緯度測定法を知つて始まつたのである。

こうして文化八年、二人は西と北に分かれていった。

（つづく）

## 参考文献

洞富雄 「間宮林蔵」

大谷亮吉 「伊能忠敬」

高橋重賢書簡 伊能忠敬宛

伊能忠敬書簡 妙薰宛 四、五、一二五 千葉県史料近世篇

吉川弘文館

世田谷伊能家蔵

## 南三陸沿岸での伊能隊の足跡

一 米国議会図書館蔵『伊能大図写』(写真版)による推定一

渡部 健三

米国議会図書館蔵『伊能大図写』発見のニュースは、日頃、忠敬にはあまり関心がないと思われている人びとからも、かなりの注目を浴びたようである。

とくに、かかわりが深い地方の大図が新聞に掲載されると、こちらの言葉で「オラホ(自分らのほう)の道を通つたらしいな。いまは廃道になつていて残念だ」などという。表現はいかにも素朴だが、これなどは米国大図発見の報道に対する反響のなかでも、多くの重要な示唆を含んでいるような感じを受けた。

岩手県内の地方紙には、享和元年(1801)第一次測量による「陸前高田、大船渡付近」、「釜石南部付近」の二種が紹介された。

幸い、写真版の提供をいただいたので、パソコン付属のスキャナを使つて観察し、『測量日記』と、なるべく古い地形図を照合しながら、伊能測量隊の通過経路の推定を試みた。ここでは、地形図の海岸線を模写した略地図に経路(陸上は太線、海上は点線)を描きこみ、おもな地点に○で囲んだ数字を付して、概略の位置を示した。

(一) 陸前高田、大船渡付近

陰曆九月十八日(太陽曆10・25)

仙台藩領大沢浜(現・宮城県本吉郡唐桑町)①の宿を出立した測量隊のうち、陸上班は昨日の残りを測量。海上班は舟で引綱測量をしながら、陸上班は昨日の残りを測量。海上班は舟で引綱測量をしなが

ら、広田湾の西岸に沿つて湾奥へと進む。その途中から気仙郡つまり現・岩手県気仙地域に入る。

今泉村の海辺を測り、高田村(いずれも陸前高田市)②に上陸して今泉から高田村の海辺と、広田半島の小友村(陸前高田市)までの海岸線を測り、小友村③の仮肝入、与兵衛宅に泊まつた。測量日記に「家もよし、貞実者」と記している。

十九日

小友村③出立。海上引綱で広田村(陸前高田市)から泊浜④まで、次いで陸地を大浜⑤まで測り、再び海上を末崎村⑥(大船渡市)に至つた。郡藏は朝から別行動をとり、③から直接陸地を経て末崎村門ノ浜⑦まで測量した。仮肝入、治五兵衛宅に泊まる。

二十日 (終日雨、逗留)

二十一日

門ノ浜⑦から手分けする。

陸上班(郡藏・秀藏)は大船渡村(現・大船渡市の中心地)⑧まで測量して綾里村⑨着(⑧—⑨間は不測量で陸路をとつたと考えられる)。

海上班(宗平・慶助)は赤崎村から綾里村(いずれも大船渡市)まで測つたが、船中の測量は岬を回り外洋に面したため波浪が高く難儀した。綾里村の入口から村内までの測量を残し、綾里村湊浜⑨に着く。

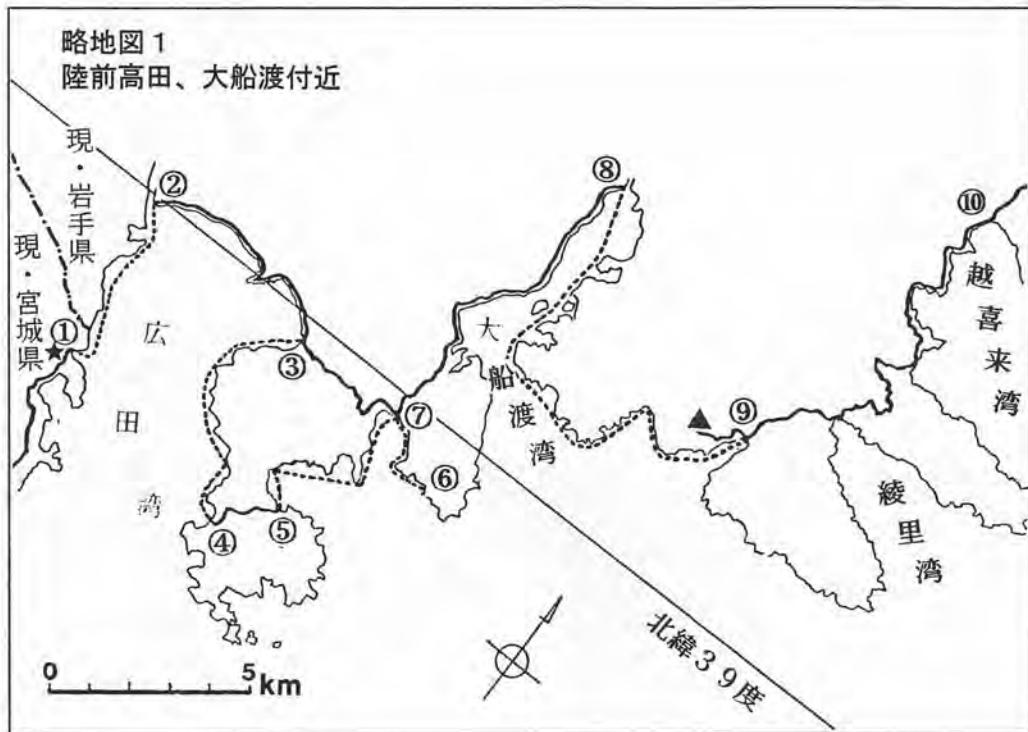
夜は晴れたが、遅着のため不測量。肝入与平治宅に止宿。

二十二日

綾里村湊浜⑨出立。

宗平・慶助は昨日の残りを測つてから、直接越喜来村(大船渡市)⑩を測量。

忠敬、郡藏、秀藏は唐船番所▲で所々を測つた。越喜来村は浜が多い。越喜来村の肝入善左衛門宅に止宿。夜は曇つていたが天測した。



【補注】

1 陸奥、陸中、陸前の三国にまたがる三陸海岸のうち、いわゆる南三陸リアスは沈降海岸で、道のない岬と切れこんだ湾の繰り返しがつづくため、伊能隊は、半島または岬の頸部を横断する方法（横切り法）を選ばなくてはならなかつたのだろう。

2 岩手県の海岸線距離は約六六〇キロあるという。伊能隊が同県沿岸を通過した距離は約二七〇キロといわれているから、海岸線距離に対する比率は四〇ペーセント程度になる。

3 宮古以北の、北三陸沿岸における測量隊の足どりを、伊能中図や測量日記で調べてみると、おおむね海岸線に沿つてることがわかる。したがつて、海岸線距離に対する測線距離の比は、岬と湾が少ない北部では高率で、南部では極端に低いことになる。

この図の範囲内だけをごく粗く目測しても、海岸線の延長に対する比率は、陸上の測線で三五ペーセント程度で、海上の測線を加えると六〇ペーセントに達するかと思われる。

4 雨の日を除けば、伊能隊は正味四日間で①から⑩までの区間を測量したことになる。もし、すべての岬に通じる道があつたと仮定し、それらを忠実に測量したとすれば、所要日数は単純計算で少なくとも三倍の正味十二日間ということになる。

塩釜以北の区間も加味すると、太陽暦では十一月中下旬にこの付近で作業しなければならず、下北半島に達する以前に真冬を迎えていた公算が大きく、第二次測量の残りは翌年まわしとなり、以後の全国測量に重大な支障をきたしたのではないだろうか。

5 現代の地形図と比較してミクロ的に見れば、伊能図に描かれた半島の形は不自然な点はあるが、これは諒としなければならない。

(二) 釜石南部付近

九月二十三日(太陽暦 10・30)

手分けして越喜来村を出立(越喜来村は略地図1参照)。群蔵・秀蔵は早朝出発して陸地に行く。

忠敬・宗平・慶助は遅れて出発し、吉浜村(大船渡市)①を経て、唐丹村(釜石市)の大石浜②より船で引綱測量をして唐丹村③に着いた。

西村善太郎宅、肝入周蔵宅に止宿。夜には風雨が強くなつた。

二十四日

悪天候のため逗留し、午後から晴れたので夜間に天測をした。

二十五日

曇天。当時は仙台藩領北端の唐丹村③を出立した測量隊は、盛岡藩領伊郡平田村(釜石市)④に入り、肝入市兵衛で昼食をとつた。「家作大いによし」と記している。

釜石村⑤では肝入宇右衛門宅に止宿。この宿も家作がよかつた。

午後晴れたので測器を仕立てたが、夜になつて曇つてしまつた。

【補注】

1 第二次測量の九月二十三日付『測量日記』に「(前略)唐丹村の内、大石浜より船にて引綱測る」とあり、つづいて「是を終とす(以下略)」と記されているが、この文意を推量しかねていた。

本稿をまとめている過程で考えたことは、

- (1) 大石浜からの引綱測量をもつて、本日の作業を終えた。
- (2) 第二次測量で連日のようにつづいた引綱測量は、いまにして思えばこれが最終だった。

の二点であるが、(2)は後日、たとえば第二次測量が完了してから、旅先で記した日記の草稿を整理中の忠敬が、海上引綱測量がこの日をもつて終わつたことを想起して書いたのではないか。諸賢のお考えはいかがなものだろうか。

2

『測量日記』に記述を省略したと思われる部分があるため、従

来、通過経路が不明な区間があつたが、かなり解明されたと思う。

- (1) 吉浜村①からは、鉢台峠△を越えて大石浜②に至る順路が通常のルートと考えられていたが、大図によれば、吉浜湾口寄りの千歳から登り、直接大石浜に下る峠○(現在通行困難)を経由していることが判明した。
- (2) 大石浜の対岸の崖上に「測量之碑」の建立者葛西昌丕が隠居所を構えたと伝えられる地点×があり、その真下の海岸だ



伝・葛西昌丕隠居所跡(平成13年11月29日・筆者撮影)



けが船の着岸が可能ということから、大石浜からの引綱測量の終点はその地点であろうとの説があつた。これは昭和三十四年、釜石市教育委員会の委嘱により、板橋・森両氏が実地調査の結果、そのように推定したもので、忠敬の天測も×地点で実施したのではないかとの説もつけ加えられていた。

筆者は前々からこの考察に疑問を抱いていた。その理由は、忠敬らは宿泊地の唐丹村(本郷)③から、夜間にわざわざ×まで移動して天測をすることはあり得ないと考えていていたからである。最近、試みに×への林道をたどつてみたが、道は途中で途切れ、昼間でさえ×への到達が困難なことを体験した。

米国大図を見ても、×に移動した形跡が認められない。

左図は板橋・森両氏が葛西昌丕隱居所跡の位置×および海上引綱測量の航路を推定した図である。



近い将来、米国大図または原寸大の複製を目的にする機会があれば、この報告とまた異なつた知見が得られることも期待されるが、いずれにしても早く実現してほしいものである。

終わりに、米国大図の写真をご提供くださつた岩手日報社(陸前高田・大船渡)と渡邊一郎氏(釜石南部付近)に厚くお礼を申しあげた。

### 【参考】

- 佐久間達夫校訂『伊能忠敬測量日記』第一巻1998(大空社)  
 板橋 源・森 嘉兵衛『釜石市唐丹における伊能忠敬沿海測定地  
 遺跡調査報告』1959  
 国立天文台編『理科年表』2000(丸善)

# 加賀藩天文暦学者 西村太冲(一)

## 河崎倫代

文家として名が出たからには、分からぬことがあつては氣の毒だ。何とぞ年に五、六十日は大坂へ出て修行してほしいものだ。この人についてはこれからもずっとお世話をしなければと思う」

太冲も希望し、高橋も必要だと述べている大坂での再修行は加賀藩が許さず、永久にかなわなかつた。

## 四、再び、城端時代

### 1 講師を辞し、城端へ帰る

明倫堂の講師は思い描いていたものとは違つたようだ。太冲は天文学には「命理」と「形氣」があるといつてはいる。命理は陰陽を説き占いに近いものだつた。形氣は太陽、月、惑星の運行や日食・月食を観測して気候や時を定めるもので、現在の科学に通じるものだつた。太冲ら麻田派天文家がめざしたのは形氣の学であつた。この頃太冲が作成した『寛政十三辛酉年真字暦』にも、「日時の吉凶や方向の禁忌をみると陰陽家の仕事であつて、天文暦象家のすることではない」と記している。まもなく太冲は講師を辞して京都へ出ることを藩に願い出たが許されず、加賀藩より毎年金五両を支給されて城端に留まることになつた。そのことをまだ知らされていない高橋至時は、寛政十二(一八〇〇)年十一月十日付け間重富宛ての書状で、次のように心配している。

「越中の太冲は藩主より手当を支給されるようになつたとのこと、少々ながらお役に立つようになつて安心した。(加賀藩では)やつている人が少ないのでそれほどまでになつたのであつて、春以来、二、三度手紙をよこしてきたが、まだまだ未熟だ。すでに加賀藩では天

### 2 伊能忠敬の北陸測量

享和三(一八〇三)年三月、内陸部の城端にも伊能忠敬の加賀藩測量のお触れが回つてきた。大坂へ出ることを許されなかつた太冲は、藩内での測量手伝いを忠敬に申し出ようと思つ立つた。太冲は忠敬の師高橋とは大坂の麻田剛立の下でともに学んだ間がらであり、観測データの交換などをおこなつていたので、忠敬のことも知つていたのだろう。

太冲はまず、江戸の高橋へ書状を送り忠敬への紹介状を書いてもらつた。太冲自身は出国を禁じられていたので、小原一白が高橋の紹介状と太冲の願状を持つて城端を旅立つた。『測量日記』によると、一白は享和三年五月二一日、美濃国(岐阜県)閑が原に逗留中の忠敬に面会した。高橋は手紙の中で太冲を次のように紹介している。

「越中國城端の町医者に西村太冲という男がいます。暦学に熱心で、先年大坂の麻田剛立の弟子になり、大坂に二、三年逗留して修行しました。その後もたびたび大坂へ出てきて、今もつて怠りなく修行しています。近年は加賀藩にも聞こえて、年々少々あてながら手当も出るようになり、加賀藩の天文の用向きをうけたまわる者になつてゐます。私へも書状をよこして相変わらず懇意にしています。この度あなたが測量御用で加賀藩へおいでとの領主からの達しがあり、大いに羨ましがり、私へわざわざ書状をよこして、なにとぞ能登一

国だけでも測量のお手伝いがしたい、縄持ちでも間棹持ちでもお使いいただきたいと、熱心に頼んできました。もつとも、この人は地理測量のことには不案内で、とてもお役には立たないと思いますが、前述の通り、領主より少々あても天文のために手当をもらっているので、この度あなたが領内を回られるのに、黙つていては領主や役人に對して相すまなく外聞にもかかわること故、少しなりともお手伝いしなくてはならなくなり、それでわざわざ私へ頼みにきたのです。私からもお頼みいたします」

太冲が何といって高橋に頼んだのかわからないが、これではまるでメントツにこだわっているだけの人間のようであり、太冲を知るものとしてはおおいに不満である。

太冲の願いを受けて、忠敬は太冲と一白の測量手伝いを加賀藩へ願い出たようである。しかし、加賀藩上層部は太冲と忠敬の接触を嫌つた。加賀藩海岸部の情報が幕府に筒抜けになることを恐れたのである。太冲と一白は病気を理由に城端に拘束され、忠敬との通信・面会も禁じられた。そのため、太冲と忠敬は一度も出会うことにはなかつた。

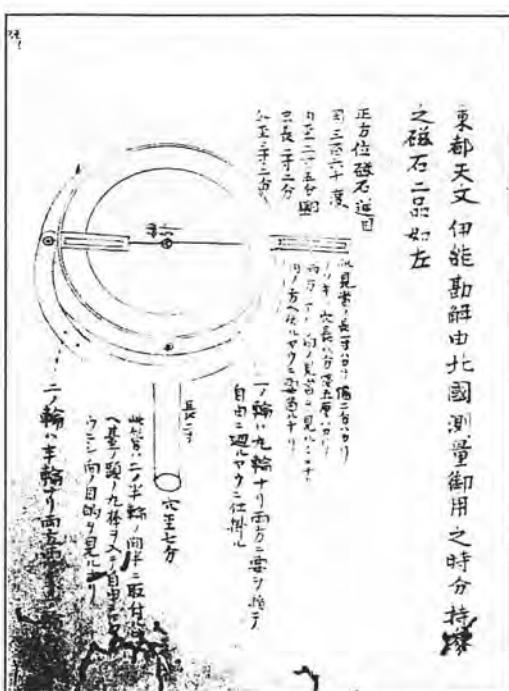
### 3 忠敬と石黒信由の出会い

享和三年八月三日、放生津町（富山県高岡市）の柴屋彦兵衛宅では、伊能測量隊一行を迎えていた。測量隊は前日から越中入りして大掛かりな測量作業をおこなつていたが、この夜の天体観測も前代未聞のことだった。見たこともない観測機器を並べて夜空の星を測つている。恒星の南中時（子午線通過）における高度を象限儀で次々に測定し、その地点の緯度を算定するのだ。この夜の天体観測は町役人だけではなく一般の人々も見学していたのだろうか。石黒信由著『測遠用器之卷』には、次のような記述がある。



がんどう

軸心磁石盤・強盜式磁石台(清都小彦太氏蔵)



「測遠用器之卷」(新潟市博物館・高樹文庫蔵)

「八月三日、放生津四十物町柴屋彦兵衛方に止宿。その夜雲が晴れ、座敷の庭に天文の道具を飾つて、衆星の度数を測るところを自分も見物した」

石黒がどのようなきさつで見学に加わったのか諸説分かれるところだが、事前に太冲から何らかの連絡を受け、忠敬との出会いの様子も後ほど太冲に伝えられたに違いない。

翌四日、石黒は測量隊に同行し、古明神村から四方村までの間、忠敬と地理・天文・算学のことなど分けへだてなく話し、名残を惜しみつつ別れたという。この頃河北湯や放生津湯の測量に従事していた石黒にとつて、ようやく日頃の思いや疑問点をぶつけることのできる相手に出会ったのだ。石黒の『測遠用器之巻』には、忠敬が使用していた「鸞窠羅鍼」の実測図が描かれ、「象限儀」については「よくもまあ工夫したものだ」と感心している。

忠敬との出会いは石黒に大きな影響を与えた。「鸞窠羅鍼」にヒントを得て、さらに改良・工夫を加えた「強盜(がんどう)式磁石盤・磁石台」を作つたのである。改良点は、方位を正確にするために磁石を二個にしたこと、水平を保つために強盜式の台を開発したこと、三角関数を使うため三六〇度目盛りを採用したことの三点である。これがのちの石黒の大事業に威力を發揮した。しかし忠敬はこの出会いのことを『測量日記』に記さなかつた。もしものことを考えてのことと思われる。六月二十四日に加賀藩領入りしてからは、幕府隠密ではないかと警戒され、また忠敬が「元百姓・現在は浪人」ということで身分的にも低い扱いを受けてきた。そんな中でおよそ一ヶ月余り、心の内を見せず日にの測量と天体観測を続けてきた忠敬にとつても、石黒との出会いと専門的な問答は、久しぶりに心はずむひとときだったに違いない。

もとより麻田派一門の特徴は公開性にある。忠敬にとつても同様だったことは『測量日記』の随所に見られるし、河北郡(石川県河北郡)十村の報告書にも「高松村の宿では案内役の村役人や十村の手代たちにも天体観測の見学を勧めた」とある。しかし加賀藩では、測量隊が行動を取るとして警戒し、藩士や一般領民との接触を嫌つた。七月二日夜、忠敬は金沢・尾張町の宿所でも天体観測をおこなつたが、おそらく城下でもあり見学者はいなかつただろう。すぐ近くに住んでいた沢田義門や遠藤高環(たかのり)ら太冲の弟子たちは、この夜どうしていたのだろうか。後の大事業を考えると、惜しい機会を逃したものである。

#### 4 城端暮らし

心待ちにしていた忠敬が越中を去つた。太冲の城端暮らしは続く。再び金沢へ迎えられるまでの二十年間の様子を見てみよう。

希望した京都・大坂行きはかなわず、失意の中での城端暮らしとはいえ、幼なじみの小原一白と二人三脚での天体観測は欠かすことなく続けられ、自宅の屋上には天測台が設けられていたという。大坂の間重富のもとに寄せられた記録は、月食観測三回、月食無測二回、日食観測一回となつてゐる。また、文化四(一八〇七)年秋に現れたジョバンニ彗星の観測もおこなつたようであるが、詳細は不明である。

城端での太冲は、加賀藩より支給される年五両の手当と、医者としての収入で生計を立てていたようだ。おそらく寛政五(一七九三)年に大坂から城端へ帰つてまもなく結婚したのであろう。二十七、八歳の頃である。妻子五人を養つていかねばならなかつたはずであるが、医者としてどれ程の収入があつたのか分からぬ。

この頃加賀藩では、十二代藩主前田斉広(なりなが)の下で蘭学志向が高まりつつあった。文化五(一八〇八)年、病床に就いた前藩主の診察・治療のため、江戸で高名な津山藩(岡山県津山市)蘭学医宇田川玄真を金沢へ招いた。玄真は門人藤井方亭ほか十余人を引き連れ、十二月八日金沢に到着した。約三ヶ月間金沢に逗留して治療に従事し、翌年一月十日金沢を発つた。その直前に太冲は金沢へ出て玄真と対面している。知人に宛てた二月二八日付けの手紙には、「玄真に会つておもしろい話を聞いたが、手紙では書けないので、一度城端まで来てほしい。」と書いている。どんな話だったのか今は確かめるすべはないが、城端にあつても金沢の情報は届いており、高名な客人と対面の手はずを整えてくれる人物が金沢にいたのだ。

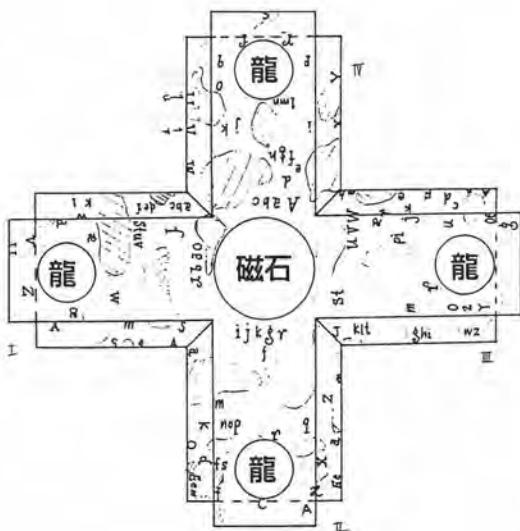
## 6 小原家との交流と一白の死

城端における太冲の生活の一端がうかがえる史料は、小原家に残る『菊斎稀雄翁釈尊淨居士率去中陰留』である。小原一白の父稀雄が病床にあつた時、太冲は延齡丹や烏犀円という薬を処方した。また、稀雄の死後に息子一白が編んだ追悼誌には、太冲も「金波」の俳号で次の三句を寄せている。

◇死にあたつて「出汐の 知死期かなしや 後の月」  
◇三回忌に 「後の月 過ぎにし秋の 影悲し」

◇七回忌に 「菊の香の たふとさもはや 七めぐり」

文化十(一八一二)年七月八日、長年の友であり天体の共同観測者でもあつた一白が亡くなつた。一白は一子相伝の城端塗八代目治五右衛門としての家業のかたわら、およそ二十年間太冲とともに城端天文学者ともいうべき業績を遺した人物であった。死の前年には「亞細亞人



渾天儀の台座のオランダ文字(景山奈央子氏作成)



小原一白作の渾天儀(城端町公民館蔵)

「一白作」と銘のある渾天儀を製作している。現在、全国三ヵ所に残る渾天儀は、一日の天空の動きを表現するだけでなく、一年間の太陽や月の動きを説明する器具として利用された。城端町公民館に収められている一白の渾天儀は台座に漆塗りが施され、V.O.O.T (北) などのオランダ文字が記されている。城端塗と天文曆学の二道に生きた小原一白の生涯を象徴するものである。

## 五、再び金沢へ

### 1 河野久太郎のこと

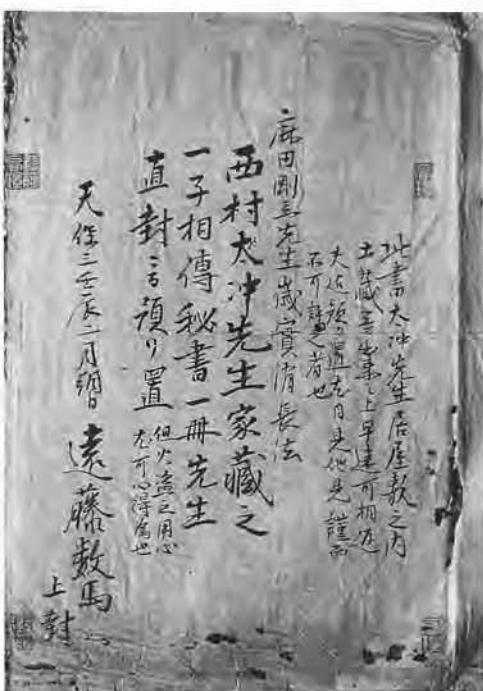
文政四（一八二一）年七月六日、五四歳の太冲は再び加賀藩に召された。「天文学によく通じた医者格」として十五人扶持を給され、寺社奉行の支配下に置かることになったのだ。今度の金沢出府は単身赴任ではなく、妻子五人を引き連れてのことだろうが、その居所は不明である。

二度目の金沢暮らしは、太冲の死までの十四年間であったが、その間の消息のほとんどは長家（加賀八家の一つ。禄高三万三千石）家臣河野家の『日用雑記』に記されている。太冲と深い交流のあった河野久太郎（一七九二～一八五一）は、兵法・剣法・槍術・棒術・馬術・柔術などの奥義をきわめ、学問を好み彗星観測など天文学にも関心を示していた。また一時期加賀藩に禄されていた江戸の経世学者本多利明に天文・測量学を学び、文政三（一八二一）年十二月の本多の死の直前まで、書状のやり取りを通して教えを受けていた。折りからの外国船出没に備えて砲術にも強い関心を抱き、この頃は近江の鉄砲鍛冶国友藤兵衛とも交流していた。太冲の死後になるが、高島流砲術の免許を受け大砲を鋳造・実射し、翻訳兵書などを入手して西洋兵学の導入

に努め、藩の兵制に影響を与えた。その向学心、実行力、幅広い交友関係など、実に驚嘆すべき人物であった。

### 2 遠藤高環のこと

太冲が城端で暮らしている間に、かつて明倫堂で太冲に学んだ沢田義門（一七七九～一八三七）と遠藤高環（一七八四～一八六四）が加賀藩の要職に就いていた。加賀藩の科学史上まれにみる活躍をした遠藤高環は、禄高五千石の玉井家の次男に生まれ、寛政五（一七九二）年、遠藤家の婿養子となつた。太冲や本多利明に学んで算学・天文曆学・測量術などに精通し、絵画や器具製作などにも才能を發揮した。金沢町奉行・算用場奉行などを歴任し、公務の合い間には太冲らと天



「歳実消長法」包紙(金沢市・遠藤金吾氏蔵)



西村太冲著「實符曆」(城端町教育委員会蔵)

体を観測し、独自に地球半径の実測を試みている。生涯の著書は約六十種百巻をこえ、透視遠近法を説いた『写法新術』や北前船長者丸の漂流記『時規（ときい）物語』が有名である。藩の要職につき多忙な身でありながら、実験を重んじ、実測を尊重し、器具の改良・発明に努力を惜しまなかつた遠藤の生き方は、太冲が麻田剛立から学び加賀の地へもたらした科学者精神そのものであり、太冲との出会いの中ではじめて、遠藤生来の資質が全面開花したといえよう。

金沢市の遠藤家では、現在三通しか確認されていない太冲の直筆書状のうちの一通を所蔵している。自宅に土蔵がなく火災や盜難をおそれた太冲が、麻田剛立の秘奥書「歳実消長法」を遠藤と沢田に一部ずつ預けたことに関する遠藤への返書である。遠藤は秘奥書の包紙に「西村先生宅に土蔵ができる次第、早速に返すべし。自見も他見も許すべからず」と記し、四隅を封印した。西村家にはついに土蔵は建たなかつたようだ。

(つづく)

□本稿筆者の河崎倫代さんからのお便りです

1998年4月から四年間金沢学院大学図書館に勤務しましたが、この四月高校へ戻りました。悪戦苦闘の毎日です。第一、三、五土曜は出勤日で、総会等に出席しにくくなりました。昨年十月二七日に富岡八幡宮の伊能忠敬像を拝見。同じポーズで記念写真も撮りました。加賀藩に残る伊能小団の比較研究と加賀藩士藤井三郎・河野久太郎の研究が現在のテーマです。会員の皆様、N H K「利家とまつ」ご覧いただいていますか。是非金沢へもおいで下さい。可能な限りご案内致します。

## 伊能忠敬（勘解由）宅への来訪者・訪問先

## 佐久間達夫

編集部から・連載中の「伊能忠敬江戸在住日記」には、「承知のように登場人物が多岐にわたっております。これまで注書きなどで一部補足いたしておりましたが、このたび、著者の佐久間さんが銅像建立記念講演会のために「来訪者・訪問先」として、付き合い先ごとに区分された貴重な資料をいただきましたので本誌に叢録させていただきました。

## — 伊能家と親族 —

- 伊能三郎右衛門景敬・忠敬の長男
- 伊能りて・景敬の妻、小川省義の娘
- 伊能稻（妙薰）・忠敬の長女、布留川盛右衛門に嫁ぐ
- 伊能三治郎（忠誨）・景敬、りての長男
- 伊能鍊之助・景敬、りての二男
- 東土川老人（小川省義）・景敬の妻の父
- 東土川新兵衛の母（小川武津）・りての母
- 東土川弁蔵・小川新兵衛家、法名修学院蓮乗信士
- 伊能秀蔵（敬慎、字儀卿、後神保玄次郎）・忠敬の二男
- 安（伊能やす）・伊能秀蔵の妻、中里経光の娘

桜井八十右衛門・伊能秀蔵の養子先

松田 琴・忠敬の三女、松田丈右衛門光遠に嫁ぐ

松田丈右衛門光遠・琴の夫、常陸国竜ヶ崎村

松田幸太郎

柏木久兵衛（関場）・忠敬の妻の出生家、佐原市新町

柏木乙右衛門・柏木久兵衛の親族、佐原村寺宿

柏木音右衛門・柏木久兵衛の親族、佐原村田宿

伊能七左衛門・伊能達の先夫の出生の家、佐原村横川岸

伊能平右衛門（道喜、神主）・佐原村下宿

伊能八之丞（八郎兵衛）・伊能家の分家、佐原村寺宿

大須賀伊八・八之丞の弟

飯高惣兵衛（尚寛、号霸陵）・上総国栗生村

飯高吉太郎（尚義、号君露）・惣兵衛の孫

布留川弥作・忠敬の長女稻の夫の生家

小河原孝藏・飯高惣兵衛の親族、曾我野村

神保忠右衛門（宗載、号梅石）・忠敬の父の兄

神保庄作（幼名常松、延宣）・忠敬の兄貞詮の子

庄作の母・忠敬の兄貞詮の妻

神保五右衛門・忠敬の父の生家の分家

平山藤右衛門・忠敬の妻達の母民の生家、下総国南中村

平山郡藏（季恭、幼名五郎作、後郡藏、通称藤右衛門）

小坂寛平・郡藏の親族、下総国南中村

桑原隆朝・忠敬の義父

桑原養好・隆朝の子

二 佐原村の人

- 久保木太郎右衛門（清淵、幼名長四郎、字幡龍、沖默、通称  
太郎右衛門）・下總国津富村  
久保木俊藏・清淵の長男、清常、幼名俊藏  
伊能藤左衛門・佐原村の名主  
永沢仁兵衛、永沢半十郎、永沢半右衛門、永沢太兵衛、  
永沢万十郎、永沢忠四郎、永沢次郎右衛門一族  
大川治兵衛（加納屋治兵衛）・津宮村  
久保木佐助・津宮村  
金田平右衛門  
岡野治兵衛・伊能家の出入り職人、大工  
妙真（窪谷セキ）・永沢忠右衛門尚俊の娘  
逸八・佐原村前原  
小川玄房  
伝四郎・佐原村舟戸、船主  
久保木太郎八・清淵の弟、清綏、幼名金治郎、後改伊兵衛、  
太郎八  
久保木佐右衛門・篠原村  
与兵衛・伊地山村  
平右衛門・橋替村名主  
本屋新兵衛・佐原村下新町  
永沢吉郎兵衛（忠四郎俊安）・佐原村  
仁左衛門・仁井宿名主

三 江戸の人

- 大野弥三郎規行・測量機器  
白木屋・反物、土産物  
天満屋八右衛門・材木屋  
紙屋五郎兵衛・紙屋  
佐原屋庄兵衛・川船積問屋  
美の屋平六・めがね屋  
永岡屋金兵衛・三十間堀七丁目、弓師  
藤田熊太郎・亀島町の桑原隆朝邸の地主  
浜江長伯  
杉田伯元・杉田玄白の娘婿  
歌川玄真・杉田玄白の養子、離縁、宇田川玄隨家を継ぐ  
益城良輔  
法乗院・伊能家の檀那寺  
朋友  
近藤重藏（守重）・蝦夷地の知識の交流  
司馬江漢（峻）・天文学の知識の交流  
会田算左衛門（安明）・数学の知識の交流  
大槻玄沢（茂質）・蘭学の知識の交流  
谷東平（以燕）・備中、備後付近の測量に参加  
江川太郎左衛門（英毅）・天文暦学の交流  
足立左内（信頭）・天文暦学の交流  
村上貞助・村上嶋之丞の伴  
間宮林藏・常陸国上平柳村（現伊奈町）

堀田信輔・堀田仁助の養子

大槻玄沢の子（立沢）

間五郎兵衛（重富）・観測機器の設計改良

市瀬悦右衛門、橋口郁三郎、中尾節五郎・肥前大村藩主大村

信濃守純鎮の藩士の子弟で、忠敬の内弟子になる

## 忠敬の上司

老中 牧野備前守忠精 西御丸下（現千代田区丸ノ内）

若年寄 堀田摶津守正教 辰ノ口（現千代田区大手町）

家士・山田綱治郎、山田幸藏

支配 佐藤修理信顕・猿楽町（現千代田区猿楽町）

支配 根来喜内斯文・本所石原町（現墨田区石原町）

支配 松平石見守正ト

組頭 須田彥次郎・小川町一ツ橋通

組頭 渋江新之助・下谷御成小路

世話役 岡村半平・小石川簞笥町

世話役 小沢権右衛門・赤羽森元町

世話役 野々山小右衛門・牛込山伏町

世話役 須藤甚右衛門

組見回り 村田忠次郎

天文方 高橋作左衛門景保・浅草（現台東区浅草橋）

渋川主水正清（渋川家八代目）・築地

吉田勇太郎秀賢・浅草御藏前

山路才助徳風・浅草

中嶋長三郎・高橋景保の手付

高橋小太郎・高橋景保の長男、景僕、幼名小太郎  
御儒者衆 佐藤捨藏（号一斎）  
林大学頭乘衡

奥祐筆 秋山松之丞・浜町

秋山内記

太田才助

佐原村領主 津田日向守信之・佐柄木町  
(現千代田区紺屋町付近)

津田山城守信久・佐柄木町

津田信富（壯之助）

家士 渡辺清藏

渡辺忠藏

加藤忠司

大久保竜太郎

## 測量隊員

高橋善助（通称助左衛門、後渋川景佑）・渋川富五郎正陽の養子、高橋至時の二男

市野金助（茂喬）・高橋景保の手付下役

坂部貞兵衛（惟道）・高橋景保の手付下役、手付手伝

下河辺政五郎（与方）・高橋景保の手付下役

青木勝次郎（勝雄）・高橋景保の手付下役

柴山伝左衛門（正弼）・高橋景保の手付下役

門谷清次郎（常久）・忠敬の内弟子、高橋景保の手付下役

尾形顕次郎（敬助、慶助、後渡辺慎）・忠敬の内弟子

門倉隼太・高橋至時、小嶋孫右衛門の従臣

小野良助・忠敬の内弟子、板鼻宿の人

永井甚左衛門（充房、要助）・高橋景保の手付下役

梁田栄藏・伊能忠敬の内弟子

坂部八百次・坂部貞兵衛の子、弘道

箱田良助（真与、後左太夫）・忠敬の内弟子

保木敬藏（永誉）・忠敬の内弟子

今泉又兵衛・高橋景保の手付下役

川口勝次郎（春輿）・高橋景保の手付下役

黒田藤吉・供侍

多田要吉・棹取

田中吉兵衛・長持宰領

加藤嘉平次・供侍

惣助・僕

## 七 第七次測量（文化八年）

### A、測量先の人

野元嘉三次・松平薩摩守江戸屋敷留守居添役

松野茂右衛門・津軽藩士

山鹿恒三郎・津軽藩士

### B、測量先藩主江戸屋敷への御礼の挨拶

小笠原大膳太夫、松平豊後守、細川越中守、松平周防守、

松平主殿頭、板倉充之進、伊東修理太夫、龜井隱岐守、

内藤龜之進、稻葉伊豆守、木下佐渡守、相良志摩守、

毛利美濃守、中川修理太夫、島津淡路守、水谷左門、久留島伊予守、奥平大膳太夫、木下辰五郎、島津式部、松平政之助、石川主殿頭、松平起之助、秋月佐渡守、松平備中守

## 八 第八次測量（文化一一年、文化一二年、文化一三年）

### A、測量先の人

松野茂右衛門・弘前藩士

江口小兵衛・朽木土佐守藩士

菅太仲・福山藩

小島九右衛門・京都

藤沢市兵衛・大村侯の使者

市瀬悦右衛門、橋口郁三郎・大村侯の家士の子

田口弥三郎・唐津藩

東島平橋・佐賀藩

### B、測量先藩主江戸屋敷への御礼の挨拶

奥平大膳太夫、薩摩侯、久留島伊予守、有馬侯、島津淡路守、

黒田甲斐守、秋月佐渡守、松平志摩守、五島彈正少弼、

永野和泉守、相良志摩守、米良主膳、土方大和守、細川侯、

松平丹波守、松平周防守、松平因幡守、松平主膳頭、

松平備前守、龜井隱岐守、松平大膳太夫、古田彈正大弼、

三浦志摩守、内藤象之進、松平備前守、大村上總介、

松平出羽守、松平佐渡守、小笠原大膳太夫、石川上總守、

宗対馬守、立花左近将監、松浦肥前守、五嶋大膳

以上

◎第五次測量以後の忠敬の出立・帰府挨拶と年始・暑中・寒中見舞先

## 感謝の気持ち・伊能ウオーカーの思い出

上田 勝俊

皆様いかがお過ごしでしょうか。全国的に展開された、かつて無い「伊能ウオーカー」は各地域の参加諸氏が白分自身の立場とポジションでこの行事に臨み、遂行されたことが、大いなる成果をもたらしたと、私は思っています。このイベントで新しく知り合った歩く会の皆様や、その他の多くの方々と親しくお話ししますと、必ず出てくる言葉は「感謝の気持ちで一杯であった」ということになりました。鳥取県内でのイベントが行われた様子は余りにも膨大で言葉に尽くせませんが、大まかではありますが私が把握している一端を振り返つて見ることにしました。

朝日新聞鳥取支局で最終確認の説明会があつた後に、支局の全面的な支援を頂き伊能忠敬を主題とした漫画「夢追い人」を連載しました。これは参加各団体の呼びかけとともに、子供たちにも理解と参加を促すため行つたものです。作者は以前手塚治虫の虫プロダクションに所属。鳥取に帰郷を果たしてから「まんが工房」を設立、鳥取県内外の昔話をテーマに精力的な執筆活動をしてきた岩田廉太郎氏。資料の提供と企画は小生がいたしました。

鳥取県土地家屋調査士会では倉吉市に在住の福嶋千恵子氏の紹介で元伊能忠敬記念館長佐久間達夫氏の著作になる「伊能忠敬の伯耆・因幡の測量」と言う冊子を大量に印刷、関係各方面と「伊能地図展」来場者に配布されました。

県内で二人目の研究会会員・田中精夫氏は、鳥取県智頭町にある山郷小学校教頭（現鳥取大学付属小学校）で五、六年生を対象とした二名を率いて、かつて伊能忠敬測量隊が通過した智頭街道の足跡を訪れて郷土を学ぶ課外活動を実施。指導に当たられた諸先生・保護者の皆さんが一体となって協力され、子供達が作成した地図や研究の成果は県地域研究大会で発表。その後の全国大会で入選を果たされました。膨大な測量日記を分かり易く著述されたのは前記した佐久間達夫氏ですが、原本通りの文章のため一般には判りにくい点があつたのですが、田中精夫氏によつてこれを横書きに日程を追うかたちで表現されたことは大きな成果であつたといえます。

最初に平成の伊能ウオーカー隊を迎えた倉吉市地区では、成徳小学校をメイン会場にし、広範囲な諸団体に声をかけてイベントへの参加をうながし、フリー・マーケットや小規模な美術作品展等に加え、幼稚園児による体操踊りなども披露。来訪者には婦人会による豚汁の振る舞いがあり、福祉施設の皆さんの協力を得て太鼓の演奏（きぼう太鼓）でウオーカーのスタートを切りました。

鳥取市地区では久松小学校をメイン会場に「伊能地図展」が開催され、数多くの一般市民が初めて見る展示品に驚嘆の声を挙げていました。また中電ふれあいホールの展示会場では小生企画による「今、なぜ幕府天文方か」をテーマにミニ伊能展示会を開催しました。

市内の「ひまわり会館」で行われた「子供達と語る会」（朝日新聞鳥取支局主催）では、招かれた伊能陽子氏による講話があり、山郷小学校の皆さんやこの講演を聞いて駆けつけた一般参加者と共に楽しいひとときを過ごしました。

平年の山陰地方の気象では降雪やみぞれまじりの寒い日々が続く

事がまま多いのですが、今回は格別に温暖なお天気に恵まれ、鳥取市役所からの出発では少し暑いと思えるほどの気象条件に、一人の落伍者も無く兵庫県美方郡浜坂町へ無事バトンタッチが行われました。

ファイナーレの会場では、歩く会の皆さんによつて花火が打ち上げられ一齊に風船を放つて盛り上げたことは、印象に残る大変面白い演出効果があつたと思います。また、浜坂町役場での歓迎会に際しては、当日解禁されたばかりのズワイガニ漁で、取れたての親蟹を入れた蟹汁が振る舞われ、冷え切つた隊員やウォーク参加者の体を温める大変有り難い土産となりました。私は以前に足の親指を骨折しておりますので直接は歩けませんでしたが自分の車で伴走して参加させていただきました。

今思うと、あの日々が走馬燈のように想い出され脳裏から離れず、今でも楽しかった思い出として子や子孫に語り繋いで行きたいと思つております。様々な形で支援いたいた事務局の皆様並びに参加されました数多くの皆様に深く御礼を申し上げて、ペンを下ろさせていただきます。

(鳥取市在住)

\*上田さんは今年二月には「伊能忠敬・天文資料展」を開催されました。また漫画「夢追い人」を送つていただきました。「伊能忠敬図書館」に保存いたします。ほんの一部だけ紹介します。『伊能忠敬が夢を追つて歩き続けた16年・歩数にして4千万歩、距離に換算すると約35、200キロで地球をひと回りしたことになります。忠敬の功績は単に正確な日本地図をついたことだけではなく：夢をもつことによつて生じる人間の無限の可能性をその行動で示し、私たちに大きな希望を与えてくれました。夢をもつことが困難になつた現代に生きる私たちにとつて伊能忠敬の生きざまこそ憧れであり夢であり、今、伊能忠敬が注目されるゆえんではないでしょうか。』と。



2





# 伊能測量隊「宿泊地一覧」作成にあたつて

## 坂 本 雄

昨年十一月末頃、研究会の事務所で、渡辺代表から「伊能忠敬銅像建立報告書」を創る計画があるが、銅像建立資金をご寄付頂いた方々の御芳名と共に、伊能測量隊が日本全国を測量した際の宿泊した処、その他を一覧表にして載せたいとの話があつた。

最初は非常に良いお話を聞くが、業者に頼むと、初めから完成した原稿を準備するのが難しい。また版下をパソコンで作成するが、修正等でやり取りするのは時間がかかるし、なかなか大変である等で出来れば手の内で作業を進めたい。ついては、私にやつて貰えないかとの話である。

原本は、研究会の理事である佐久間達夫氏が執筆された本で、これをもとにA4版二段組で作成することである。

ところが、この本を見た瞬間あまりにもページ数が多いのにびっくりし、私は難しいと一瞬ためらつた。理由は、先ず私自身タイピングの速度が遅いこと、あまり長時間没頭して出来ないこと、ひいては最終的に御迷惑をかけることであつた。しかし、誰かがやらなければ先に進まないと思い直し、引き受けることにした。

取り掛かる前に、大凡次のように取り決めを行なつた。

・期限は十二月末とする。

・A4版二段組で、日にち、伊能隊の宿泊地、現在の市町村名、宿泊地、天体観測の有無と観測内容を入れる。

作成途中で西暦による年月日が欲しいことが分かり追加した。  
・半ページで一日から三〇日(又は二九日)までの一ヶ月分を記す。

・見易くするため、測量隊を本隊と支隊を分け、上段に本隊を下段に支隊を記す。又、半ページに一ヶ月分が納まらない場合は、次ページに残りを記す。

但し、これに従つて記述すると、空きスペースが沢山できることが判り、半ページに表を二つ入れることを行つた。このため、当初の予定どおりには行かなくなつた。

・出来しだい著者である佐久間さんに校正をして頂く。

と云ふことでスタートした。先ず、大凡の予定表を作り、あまり肩がこらない程度に楽しんで進めることにした。

伊能忠敬の全国測量(江戸府内測量は除く)は、第一次の蝦夷地測量から第九次の伊豆七島測量まであるが、長い日数を要した九州測量(第七次一回目、第八次二回目)が後に控えているので、最初の方で遅れを出さないように注意をはらつた。

先ず表の枠組み・書式を設定し、原本を見ながら入力を開始したが、ただ入力をしていくだけでは面白くない。もう少し宿泊地名に関する事柄、歴史、文化遺産等について理解して、作業を進めていった方がより楽しい。又、親しみを持ってこれから作業を進めることが出来る。そこで関連する本を購入し、その土地に関する知識を予め得ておくことにした。

前置きはこれ位にして、中身について少々述べてみたい。

第一次の蝦夷地測量では、一日に測量して歩く距離が非常に長いの

にはびっくりした。寛政十二年（一八〇〇）閏四月十九日に深川の隠宅を出立してから、二十一日間で三厩に到着している。JRの鉄道の距離で795キロ（実際の距離とは多少異なるが）があるので、約38キロ／日を測量しながら踏破したことになる。驚きである。

五月十九日に蝦夷の吉岡に渡り、いよいよ蝦夷地の測量である。当時の蝦夷地は本州の街道とは異なり、街道といえるものが存在せず、また道が整備されておらず非常に険しい行程となつたはずである。この道を福島—喜古内—箱館—大野村—鷺の木村と進んで行く。この途中には大沼・小沼があり、又駒ヶ岳が雄大な姿を見せており、ほつと一息つく場面もあつたのではと思われる。

さらに、洞爺湖がある虻田は、最近噴火で有名だが、当時の有珠山はどのような状態だったのであろうか。思いは尽きない。八月七日に西別（根室・別海町）に到達し、二日間逗留し、そこから引き返していく。復路も同じ道を通つて測量を行つていて。帰り道ぐらいのんびりしたらと思うのだが、丹念に測量を行つてるのは感心する。

第七次・第八次の九州測量は、この二回の測量でページ数の半分以上を費やしている。これは本隊と支隊に分かれて測量しているのが、ページ数が増えた理由の一つである。また、一回目の測量は、目的は

九州測量であるが、中山道を通つて滋賀・京・大阪から山陽道を測量して九州に入っている。九州東海岸の測量の後、鹿児島から熊本・天草諸島を測量し、大分、福岡を通つて中国地方に入り、この地方を広い範囲で丹念に測量している。多くの日数を要したのもうなづける。さらに、二回目の測量は九一四日を要し、一回目の一・五倍と多くかかっているが、これは第五次測量の中国沿岸の瀬戸内海の島々と同じく、壱岐・対馬を始めとして多くの島があり、この測量に予想以上

の時間を要したためであろう。また福江島では坂部貞兵衛が病に倒れ死亡している。一度行つて見たいところである。

さて最後になつたが、私事で恐縮であるが、私の生れ故郷は、鳥取県の用瀬で、伊能忠敬研究の二五号で紹介のあつた「伊能忠敬子ども調査隊—伊能忠敬の測量した道—智頭街道の宿場町の調査」に出でくる因幡地方の街道にある町である。参勤交代の道であるが、現在はこの道に沿つて、第三セクターによる智頭急行線が走つており、京・大阪への足は大変便利になつていて。

十二月も終わりに近づいて、ほぼ入力を終えることが出来たが、佐久間さんのチェックおよび修正箇所の再入力が年を越すことになつた。当初の予定より二十日程度オーバーしたが、なんとか無事入力を完了させることができた。

作成にあたつて、渡辺代表に多大なご指導を頂いたことに大変感謝している。本史料は從来の史料をもとに、追加・改訂したものである。伊能忠敬測量の調査にあたつて、大いにご活用いただくことを期待している。（さかもとたかし・幹事）



## 伊能忠敬の足跡

伊能忠敬銅像建立報告書

## 伊能忠敬の江戸在住日記（八）

## 佐久間 達夫

九州第二次測量を終つて江戸帰着の日からの江戸在住記録（続）

原本 忠敬先生日記 五〇

文化十一年（一八一四）

九月一三日 晴 五ツ時過出宅 平服にて法華院、会田三左衛門、津輕侯御屋舗へ罷越、湯谷八十八金百疋持参

同 一四日 晴 佐原村より、おりて、おこと、鍊之助、七左衛門伊左衛門、その外登る

同 一六日 晴 仙石越前守在所工藤弥次郎より書翰至（ママ）來 取次石井左太夫

同 一七日 曇 伊東隨三より奥地の図戻る

同 一〇日 曙 西之久保仙石屋舗へ書状出す

出石書状経王寺土肥正兵衛、工藤弥次郎 取次石井左太夫

同 一二日 雨 尾形謙次郎、高橋家へ書物の儀に付遣す

同 一五日 晴 蝦夷会所聞宮林藏へ書状出す

同 一六日 晴天 今暁食不見 ○大工治兵衛

同 一七日 晴 今暁星測有 ○治兵衛来る

一〇月五日 晴 宇（ママ）沢権右衛門来る

同 一二日 曙晴 今日組頭渋江新之助殿へ心願書同書相認持参候處、加筆有之持返る

同 一三日 晴 組頭渋江新之助へ持参候心願書同書受取相済 且案文別帳に有之

同 一四日 曙天 無別条 湯谷八十八来る 我等へ金百疋、門人三人へ武朱づつ贈る

同 二八日 曙曇 渋川助左衛門殿入来

一月一日 晴 小河原孝藏、今日より我等方へ来る 一、高橋作左衛門殿入来、六ツ時頃帰られる

同 一二日 晴 曙 冬至 九ツ時過 平服にて此日高橋家招きに付罷越し、夜六ツ半時前帰宅 今朝土産の為 鴨毫羽高橋へ贈る

同 一二日 曙天 曙後晴 筑州上野小八、青柳勝次、山本源助より先達而の返翰且、出雲風土記一冊戻す 大野弁左衛門方へ頼遣す 芸州竹田和平治方より問合書状来る 右の儀返翰遣す

同 一二日 晴天 今暁星測在

同 一二日 晴天 大野弥三郎入来 日向、薩摩、豊後国図三枚借遣す星図三軸相返す 大工兩人来る 手島屋伊兵衛登る 妙薫 津田家より白木屋へ暇乞に行く

貸すする図が、途中段階で制作した伊能図が、参考とした他の図が分からぬが、地図貸し出しはよくおこなわれている。

正装して、大村侯へ参府の挨拶である。家中の門人を

同 一二日 晴天 五ツ時過麻上下着、大村上総り細工に入る

同 一五日 雪風終日降る 大工治兵衛不來る

同 一六日 晴天 今暁食不見 ○大工治兵衛

同 一七日 晴 今暁星測有 ○治兵衛来る

一八日 曙天 ○治兵衛不來

一九日 昨夜雨 直に雨 ○治兵衛不來

二十日 晴天 今暁星測有 ○治兵衛不來

二二日 曙天 ○治兵衛不來 江戸測量の儀に付、日合幾日相掛候哉、何方より相始め候哉 人足日用錢等の儀種々掛合有之趣、今泉書付持参

同道しまかり出る。どうせん、面談し測量談義をおこなつたろう。忠敬が面談した諸侯としては、大村侯のほか、平戸侯、五島侯がはつきりしている。肝心の堀田撰庭守については、挨拶くらいは確実にあつたと思われるが、対談があつたかどうか、確かな証拠はない。

一、安達（ママ 足立の誤りか）左内寒氣（見廻の為入來 屋伊兵衛佐原へ持參

阪本という人物は不明であるが、嵩山社碑銘並びに白川侯副碑銘を受け取り、お札に琵琶湖図を渡している。琵琶湖図は贈答用に作られたといわれながら、さっぱり譲呈した記録がなく残存数も少ない。その図を渡すほどこの碑銘は大切なもののようである。忠敏にとつて、白川侯・松平定信の副碑に価値があつたのかもしれない。

二月朔日 晴天 今晚妙薰 手嶋屋伊兵衛同道  
左原才、下5、四ノ持出三、云假ノ

同二八日晴天秀藏今日より我等方へ引越す○大工兩人来る  
同二七日晴天五ツ時過出宅為寒中見延泊川家、林大学頭殿、堀田撰津守殿、松平美作守殿、津田家、渋江新之助殿へ罷越、七ツ時過帰宅堀田殿計(ばかり)麻上下着用余は平服にて罷出る

忠敬の「男秀藏は、江戸で桜井八十石衛門の婿養子となつてゐたが、離縁になつた。そのための引越し。」

同二九日曇天

一、嵩山社碑銘並びに白川侯副碑銘 阪本林

平より来る 且此方よりも琵琶湖の全図

一、算法、天生法初編上下二冊正作借用 手嶋

## 文化十二乙亥年

応対に出た郡方の役人。島原藩は忠敏に藩領部分と九州の地図を依頼しており、忠敏没後に引渡された。内弟子・箱田左大夫の名前で出された謝礼金の領収書が地元島原の神原史料館に伝えられているが、地図はまだ発見されていない。

同 一二日 晴天 曇家小西藤三郎引移に付来る  
同 二三日 曙 今日紙屋新兵衛を頼み餅搗 紙  
屋より使者一筆来る  
同 三四日 曙 沢川家へ借用の書物相返す  
同 二六日 晴 御用今日より休み 桑原家内来  
る 今日煤取り  
同 二七日 晴 歳暮の為め塗師屋清人より鮒一  
台、屋根屋より箸一袋 左官より田  
作一台来る  
同 二八日 晴 歳暮の為 平服高橋家へ参る  
相沢文五郎へ御扶持方はいし（廃し）  
候為詫、半紙一貼遣す 九ツ時前帰  
宅（保木敬藏病氣見舞介抱として）  
普通の家と同じ暮れの行事である。工事に従事した職  
人達から歳暮を貰つたり、世話をなつた礼をしている。

坂部八百次は、坂部貞兵衛の子で、父の後を受けて曆  
局に出仕し、伊豆七島の測量に参加する。文政三年六月  
病死。

同 四日 晴天 大風 五時出宅にて筑（マニ）  
地沢川助左衛門、桑原隆朝、林大学  
頭殿、堀田撰津守殿、松平石見守殿、  
沢江新之助殿、高橋三平殿へ年始に  
罷越、八時帰る  
同 七日 晴 高橋家御用始に付五時出宅七時  
帰る 尤、出かけ隣家年始初  
数表到来 晚、保木敬藏帰宅

小嶋は第五次測量の頃、禁裏付をしていて、御所見物  
の案内などされている。現在の役職はわからないが、京  
都におり、対数表を届けている。忠敏も対数表は所持し  
ているが、別なものが、上方で入手できたのであるつか。

同 一〇日 晴 大村侯より郁三郎断に中嶋乾  
(方) 来る 津田壯之助様方渡辺亥左  
衛門より、親忠藏病死の由、為知來  
る 右に付尾形謙次郎悔に遣す  
妙薰夜四ツ時佐原より着いたし候  
晴 大風 高橋作左衛門殿年始に來  
る 吸物酒出す 林侯へ任先例に  
亮一双献上之 出石侯家中竹村小  
太郎より書状來る  
同 一二日 晴 弘前侯中松野茂右衛門年始に來  
る 浦和宿青木善兵衛方へ書状遣  
す 尤蒲和宿問屋へ向出す  
同 一四日 晴 六半時雪ふり出し終日降る 暮方迄  
に六寸計積る  
同 一六日 晴 曙 福岡藩中広羽八十郎より書  
状到来並換金一両、島ちらりめん一反  
到来 九ツ過より妙薰津田様へ行  
く 夕方雪少し降り直に止む  
同 一七日 晴 夜に入保木敬藏引越し来る  
同 一八日 晴 三治郎並豊藏 津田様へ上り御  
目見被仰付年始申上る  
同 一〇日 晴天 五時出宅にて津田様御内渡  
辺亥左衛門方へ病（見舞）に行く  
敬藏同道致し、尤九時帰る  
同 一二日 晴天 渡辺清藏入來あり  
同 一二日 曙 景後雨 五ツ半時より深川八幡  
宮並法華院、山鹿八郎左衛門、松野  
茂右衛門方へ為年始参り中飯 帰  
掛け佐原や庄兵衛方へ立寄り夕刻  
帰宅 久保木太郎右衛門、加納屋治  
兵衛登る

同 二四日 雨 久保木太郎右衛門、鰐（ひらめ）一枚賜る

同 二七日 曇天午后晴天 保木敬藏忌半減今日より出勤 大工治兵衛細工に来る

同 二九日 晴天 大工治兵衛来る 久保木、加納屋佐原村へ今朝出立

同 三〇日 曙天 大工治兵衛来る

二月 肌日 今朝雨止む 終日曇 今朝九ツ時前平服にて荒井平三郎殿へ参り、小菊十五束持參 それより福山藩中曾太仲方へ立寄小菊五束持參七ツ半時過帰宅 大野弥三郎来る

小菊は小菊紙のこと、懷紙の一種。福山藩の曾太仲を訪問している。曾太仲とは測量途中で邂逅している。

同 一日 初午 曙折々小雨 尾形謙次郎、高橋家へ野帳長持取りに参る 大工治兵衛来る 田中屋伊助来る 明日、江戸市中測量、種々繁多の事

三月 六日 曙 桔木土佐守藩中江口小兵衛門入る 我等方へ綿紬島（縄）壱反、看代金百疋、門人二人へ金式歩武朱肴料贈る 後度々是より稽古に入来る

同 一〇日 晴 伊豆測量之儀、被仰付 曙 一日 曙 曙一昨夜、神田多町出火に付、津田家へ火事見廻 且、清喜老病氣見廻に参る

同 一四日 曙晴 平山郡藏立入御免願差出す 伊能七左衛門佐原へ下る

同 一五日 曙天

見出し 同書 伊能勘解由

私弟子、下総国香取郡中村に罷在候平山郡藏儀、年来私へ隨身仕候者に御座候間、去る文化二十五年西国筋測量御用の節召連候所、於御用先、被是不取締不法の儀有之候段、達御聞候に付、同三寅年十二月帰府後永の御暇遣候様被仰渡候。然る處、右郡藏儀元來貧窮の百姓にて諸親類共より合力等を請、老母妻子等養育仕、家業取続罷在候所、右不埒の儀仕、永の暇被仰渡候者の儀故、其後親類共一統出入相絶右合力等無御座、老母妻子等養育相成、追々難済仕候に付私方出入仕候様相成候得ば、老母妻子等養育相成家業取締続出来仕候に付、私方へ出入仕度旨、弟子共迄度々申越候乍然、御暇被仰渡候者の儀故、右出入の義、私存寄にて申付候儀難相成段申聞置候所、次第困窮仕老母妻子等養育難仕趣に御座候間、最早御暇被仰渡年数も相立候儀故、可相成は一通り私方へ出入已（のみ）差免申度奉存候 左候得ば前々の通り諸類音信も相成、右老母妻子等安心仕、家業取続出来仕候趣に御座候 大、決て御用向手伝は、為仕間舗一通り出入已（のみ）差免候ても可然哉、此段奉伺候 以上

平山郡藏を呼び戻すための申請書である。平山家が困窮していたなどとは思われないが、何とか理由付けをして郡藏を許したかったのである。出入りだけ許し、御用はさせないといつてはいるが、実際には、地図制作にあたらせてはいる。しかし、忠敬が亡くなると、郡藏も病を得て実家に歸り死去する。地図仕立ては、このあとも長く続いているが、長年測量隊を離れていた郡藏は、忠敬がいなくては働く場はなかつたろう。

三月 一六日 晴 川口勝次郎今日より出勤 洪川助左衛門殿御出の事

同 一七日 曙 間宮林藏方へ申越の薬種書状添、田中金六方へ尾形手紙にて蝦夷会所へ頼遣す 代金三歩と錢六十八文同人より 差越候旨申遣す

同 一八日 雨 江口小兵衛来る 八線表借（マ）ニ遣す

同 一二日 曙 江口小兵衛より鮮肴一箇到来

同 一三日 曙 遠州横須賀藩中高森宗右衛門來る 観好（マ）と云う 松野茂右衛門入來 江口小兵衛入來

同 二四日 曙 今朝五ツ半時平服にて高橋家へ

罷越し、七ツ半時過帰宅 京都曆師

峰谷内匠来る 伊能七左衛門登る

同 二八日

曇 晴 高橋作左衛門殿、沢川助左衛

門殿御出 今口伊豆国 出立の者

御手当被下旨被仰渡書御持参

同 二九日 曙 板鼻宿小野良助方へ、真綿代金

式歩以書状差遣す

四月 朔日 曙 福島良平殿来る 右今浅草手附

被仰付候吹聴也 山中忠左衛門方

より金子入書状来る 悅右衛門胸痛

に付敷にて養生の旨申越す

同 三日 曙 奥村喜三郎来る 四日市山忠

左衛門へ金五百疋返し遣す 右手

紙村田七右衛門へ相頼む

同 六日 曙 昨夜七ツ半時ころより下谷阿部

川町辺出火、高橋家へ尾形謙次郎見

廻に遣す

同 一五日 曙 伊能道喜登る

曇 晴 妙薰 三治郎、道喜佐原へ下

る 平山藤石衛門来る 棒取要助

来る 孝蔵、青山様屋敷へ行く

(平山藤石衛門は平山郡威のこと、出府

挨拶であろう)

同 二六日 曙 八ツ時より高橋家へ舟にて行

く箱田左太夫、保木敬蔵、高橋家へ

行く 黒田藤 (ママ) 吉来る

同 二七日 曙 晴 伊豆廻島為御用、永井甚左衛

門、坂部八百次、門谷清次郎、内弟

子箱田左太夫、保木敬蔵 今六ツ半

時出立 見送り尾形顯次郎、伊能七  
左衛門、品川迄龍越

伊豆七島を測つた第九次測量隊の出発である。尾形と

伊能七左衛門が品川まで見送りに出た。秀蔵は出なくて

よいと止められていたのだが、無断で品川まで出て、隠

宅から出されるキッカケとなる。

門谷清次郎は、幕府の同心組頭八郎右衛門の子である。

はじめ、内弟子として参加したが、のちに高橋景保の手

付下役となる。シーボルト事件に關係して、天保元年三

月、四十七歳のときに江戸十里四方追放となる。

同 二八日 晴 今夜平山藤右衛門帰宅 乗舟の

野弥三郎来る 胡麻一

袋持参

同 二九日 晴 佐原村伊能八之丞来る 胡麻一

同 二日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

同 三日 晴 今夜平山藤右衛門帰宅 乗舟の

野弥三郎来る

同 四日 晴 今夜平山藤右衛門帰宅 乗舟の

田五郎、石沢又兵衛来る 右四軒へ

積り

同 五日 晴 岡田作次郎、藤田熊太郎、古藤

田五郎、石沢又兵衛来る 右四軒へ

九ツ時為返札行く

同 六日 晴 四時雨少々ふる 奥村喜二郎來

る 八線表一冊、コンハス壱丁遣す

田口弥三郎方より絵図九枚返る

又々四枚かしつかわす

同 七日 晴 四時雨少々ふる 奥村喜二郎來

る 八線表一冊、コンハス壱丁遣す

田口弥三郎方より絵図九枚返る

又々四枚かしつかわす

同 八日 晴 四時雨少々ふる 奥村喜二郎來

る 八線表一冊、コンハス壱丁遣す

田口弥三郎方より絵図九枚返る

同 九日 晴 会田算左衛門来る 広羽八十郎  
来る 四時より雨

同 一〇日 晴 三治郎並又兵衛小僧九ツ時来る

今日は暑さつよくひとえものきる

同 一一日 晴 佐原村前原逸八来る 一瀬悦右

衛門来る 小僧改名空蔵と呼ぶ

同 一二日 晴 七左衛門、又兵衛帰村 今夜乘

船の積りにて新堀川岸へ行く

同 一三日 晴 美濃岐阜岡田半右衛門より書状

至 (ママ) 来

同 一四日 晴 高須藩中林庄右衛門来る

ている。きびしい人だった。

五月 朔日 雨 江口小兵衛日光より帰り候よし、

謙次郎方迄書状參る 尤、右為土產

朱ぬり食箸致到来候

袋持参

同 二日 晴 佐原村伊能八之丞来る 胡麻一

袋持参

同 三日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 四日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 五日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 六日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 七日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 八日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 九日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 一〇日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 一一日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 一二日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 一三日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 一四日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 一五日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 一六日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 一七日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 一八日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 一九日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二〇日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二一 日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二二日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二三日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二四日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二五日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二六日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二七日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二八日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二九日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二〇日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二一 日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二二日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二三日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二四日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二五日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二六日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二七日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二八日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二九日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二〇日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二一 日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二二日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二三日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二四日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二五日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二六日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二七日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二八日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二九日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二〇日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二一 日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二二日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二三日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二四日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二五日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二六日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二七日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二八日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二九日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二〇日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二一 日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二二日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二三日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二四日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二五日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二六日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二七日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二八日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二九日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二〇日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二一 日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二二日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二三日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二四日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二五日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二六日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二七日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二八日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二九日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二〇日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二一 日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二二日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二三日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二四日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二五日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二六日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二七日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二八日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二九日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二〇日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二一 日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二二日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二三日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二四日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同 二五日 晴 佐原隆朝、江口小兵衛来る 大

野弥三郎来る

同	一五日	晴 江口小兵衛より酢(スシ)一重 至(マ)来
同	一六日	晴 人見唯右衛門より菓子一折、林 田万作より銅板地球為射(謝)札銀 二朱来る 川口勝次郎今日出勤 佐原義介来る
同	一七日	晴 夕方より雨雷鳴いたし候 雲州 知井宮村山本屋六郎兵衛方より和 布壺箱被贈候
同	一八日	晴 佐原村甚七来る
同	一九日	晴 滝川様御出、蕎麦上申候
同	二〇日	晴 四時微雨直に止み向暑強し 豆 州下田早出にて出役の方より書状 至(マ)来
同	二一日	朝雲天 北風吹く 孝蔵青山屋敷へ 遣す 今日は至つて涼し
同	二二日	曇 終日曇 北風にて至つてさむし 渡辺兵左衛門来る
同	二四日	曇 奥村喜三郎来る
同	二五日	雨 曇 孝蔵青山様へ行く 夜に入り微 雨
同	二六日	曇 御持(マ)与力八十嶋周助娘 込山伏丁川口持参 かね女七歳書扇一本貰う 住宅牛
同	二八日	晴 江口小兵衛より書状、並びに

同	六月	朔日	曇	下河辺、川口、日食に付六時少し し過來る 広羽八十郎来る
同	四日	晴	孝蔵、飯田丁へ行く 鉄砲洲熊 のや勘吉方にて両十八俵のスミ老 両買い、内二分分(二分ぶん)地主へ 遣す 舟賃百文払、目方改め六貫め	
同	五日	曇	朝少し雨降る 三十間堀方や与 七方にて炭四十二俵買両に二一俵 がえ 内三十一俵地主へ遣す 十二 俵内へ取る	
同	六日	微雨	備中 谷東平方より書状来る 商人・忠敏らしい扱い。地主の分を含めて炭のまとめ 買いをして分けている。一軒から買い、しつかり目方も 改めている。	
同	七日	晴	小嶋九右衛門方へ書状使わす 人見 只右衛門方へ封込嶋屋より飛脚便 に出す	
同	八日	曇	大野弥三郎来る	
一二日			寺沢善蔵貝賀仰付候に付、右	







□歴史の舞台・伊能図を旅する「伊能忠敬ツアー」誕生

七月二四日から二七日(三泊四日)

行程 一日目 羽田→函館→松前町→函館山(測量記念レリーフ)

湯の川温泉泊

二日目 湯の川→有珠山→洞爺湖→地球岬→登別温泉泊

三日目 登別→襟裳岬(最も測量が難攻した地)→釧路泊

四日目 釧路→厚岸→西別(伊能測量最北の地)→中標津→

羽田

講師として渡辺代表が同行予定

□テレビ書評番組「本と出会う」に渡辺代表が出演

キヤスター・小澤美穂さんが作家、文化人などゲストから「思いでの一冊」について尋ねるブックトークの三十分番組です。6/15 東京放送(TBS)系列のCS、BSで放映されました。

「思い出の一冊」は近頃武揚堂から出版された「伊能図」でした。

\*後日、小澤キヤスターからのお便り

日本史の教科書の中でしか会つことのない伊能忠敬に「再会」する機会を与えて頂いたことに感謝します。「伊能図」は素人の私が読んでも大変わかりやすく、楽しいので、家中の者に、にわか専門家のよううに本を見せて説明しております。

□公開講演会に多数の応募

① 総数 77名  
② 住所区分 江東区

その他の東京都内

21名 51名

千葉県 5名  
③ 年齢構成  
八十台1名 七十台11名 六十台22名  
五十台11名 四十台5名 三十台2名  
未記入25名

④ 男女比率  
男性 49名 女性 28名  
⑤ 主なコメントから  
・伊能忠敬の名を見ただけで是非と胸おどらされたので。  
・伊能忠敬について調べている。特に日本全国の測量について。  
・伊能忠敬への興味は昨年のNHKドラマがきっかけ。昨夏には佐原の記念館も見学。「四千万歩の男」も読んだ。忠敬先生の知識を深めたい。  
・昔から伊能忠敬のパワーに感じていたので、その理由が知りたい。  
・伊能忠敬の人生全般を知りたい。  
・忠敬の生家は何度か見学したが、更に知ることがようと思う。北方領土にも関心がある。  
・鳥瞰図の研究をしている。伊能さんにも関心がある。

\*募集案内のエリアが江東地区のため、応募の七割近くが地元の方。東京都内では周辺区からの参加が多い。年齢では八五才の男性から三五才の男性まで幅広い層から応募があつた。特に若い三、四十代の関心度が高まっているのはたのもしいかぎり。男性が三分の二近くに。夫婦、友達など複数応募も目立つた。応募の動機は必要記載事項ではなかつたが是非講演を聞きたいという思い入れがコメントにあり、伊能ファンとしての手ごたえを感じた。

## □歩測大会開催 茨城県つくば市の国土地理院で 6/2

第一回達人戦がつくばの国土地理院「地図と測量の科学館」前広場で開催され、研究会から、渡辺代表、伊藤さん、山本、新沢の各氏が役員として参加しました。



写真は東京新聞 6/10

歩測に挑戦したのは「手古舞」練習のお嬢さんたち。手古舞は大祭のみこし行列の先頭を行く。三年に一度の大祭に今から練習が始まっている。

## □銅像建立記念ウォーク並びに歩測大会開催 6/9

「ビッグウォーク」は佐原市を六日に出発し、忠敬が江戸へ向かつた木下（きおろし）街道を四日間歩いて富岡八幡宮に百名ほどが元気に到着した。今日だけの「大江戸ウォーク」は五コースに別れて歩いた。千葉県市川市、東京駅、上野公園、埼玉県戸田公園、川崎市から伊能銅像をめざした。ウォークの中に伊能陽子さんは先日、胆石の手術をしたグループの元気な顔が見られた。陽子さんは先日、胆石の手術をしたばかりだがそれを少しも感じさせない笑顔だった。

歩測大会は銅像前からスタートして、八幡さまをコの字に回るコースで行われた。128名が挑戦し12名と小学生1名がみごとに誤差1%以内になり、達人の認定を受けた。研究会からは、遠路、福岡の石川氏をはじめ渡辺、山本、新沢、福田の各氏が役員として参加した。

## □記念ウォークの各紙報道から 6/10

昨日の記念ウォークと歩測大会が、読売・都民版、産経・東京版、日経・社会面、東京・東京版に。散歩気分で近所に住む七十才の方が二才のお孫さんと参加。「忠敬さん気分でゆかりの地を歩くのは気持ちがよい」と歩測達人氏、など写真つきの記事になつた。



幼児からお年寄りまでが忠敬気分を  
楽しんだ全日本歩測大会=産経新聞 6/10

## □VERA(天文広域精測望遠鏡)公開に伊能図が一役

一般、国立天文台水沢観測センターが施設公開された。口径が20メートルある電波望遠鏡の説明パネルにはこう書かれている。日本地図の場合は「それまでの不正確な古代日本地図が忠敬の精密な測量によ

り、正確な日本地図が出来上がった」これに対し「現在の私たちの銀河系図は伊能図以前に相当します」「VERAによる精密三次元銀河系地図の解説に」と続く。この電波望遠鏡は岩手県水沢市のほか東京都小笠原村父島、鹿児島県入来町、沖縄県石垣市の観測局に設置され、宇宙と地球の精密測量マシンとして活躍している。

\*水沢市の小野寺誠氏（元伊能ウオーカ・ステージ隊）より

### □伊能忠敬も賞味！？測量隊の昼食再現：中国新聞から 7/6

江戸時代、日本で初めて実測の全国地図を完成させた伊能忠敬を顕彰する巡回展が開かれている南区仁保新町の仁保公民館で四日、地元の主婦たちが、忠敬の一行が食べたとされる当時の昼食づくりに挑戦した。

公民館で料理を学ぶ近くの主婦ら六人が、タイ、レンコン、シイタケの煮付けや、イカとワカメのみそあえなど三点を三十人分調理。見学者たちに振る舞つた。献立は、仁保で生活資料館を開く川崎寿さんらが古文書などを手がかりに再現した。

忠敬は一八〇五年と翌年の第五次調査で県内を訪れ、仁保の西福寺にも滞在。前住職の北小路智津子さんは「当時の人たちが気持ちを込めてもてなしたことが伝豪華な料理。忠敬も喜んだと思う」と満足そうだった。

河崎さんらが企画した巡回展「忠敬、日本を測れ！測量隊がやつてきた」は十三日まで。七日には、神辺町にある菅茶山記念館講師の菅波寛さんが「忠敬こぼれ話」と題して講演する。

\*菅波さんのご活躍のもとが記事になりました。

### ■お知らせ

連載の「伊能古文書教室」は休載いたします。

### 事務局日誌2 アメリカ議会図書館とは

#### 誕生は忠敬さんの全国測量開始と同じ年！

昨年、渡辺代表が発見された二百七枚の伊能大図はアメリカ議会図書館にある。この図の来歴については明治十二年以降ではと考えられるが、受け入れの刻印はなく、いつ頃かはまだ判明しない。こここの地図収蔵庫は、四百六十枚の内部面積に相当する広さだそうだ。伊能忠敬が全国測量に旅立つたのは寛政十二年（一八〇〇）の六月十一日（陽曆）。議会図書館の誕生はこの日より二ヶ月早い四月二十四日。首都移転の法案に併せて図書館開設の法案が連邦議会で可決されている。



新世界アメリカでフロンティアを開拓した人々は、知識の獲得にも情熱を注いでいた。その後、国の成長と共に発展を遂げ、現在では世界最大の情報センターに成長している。

#### 四千万歩の三倍のコレクション！

図書館なので図書・雑誌が多いかと思うとさにあらず。図書類は二割に満たない。その他の資料は音声レコードであり、映像ビデオ、地図、写真など多岐にわたる。総数は一億二千万点に近い。

#### グラン・ド・いっぱいの地図は四百万点！

当初の新生国家の政府にあっては自国を含めた地図は、まず集めなければならぬ第一の資料であり、在外公館を通じてあらゆる手段で地図が求められたという。まとまつた日本関係の資料を手に入れたのは明治八年（一八七五）政府文書交換により議会図書館のコレクションに加わっている。アメリカ人の地図への関心は北米大陸が祖先により発見されたことから、北西航路の開拓など「フロンティア」を実現し終えるまで地図は唯一の拠りどころであった。江戸時代末期にはアメリカの捕鯨船がハワイを基地にして、日本近海の水戸沖などに殺到していたという。その後の第二次世界大戦や昨近のアフガニスタン戦線にいたるまで、地図は政治的な意味をもつ重要な資料であつたから、その初期から地図収集をコレクションの重点にしていたのがわかる。収集された地図は四百万枚にのぼるという。この中には日本海軍がつくった鬼界が島の模型図や月面着陸用のクレーターの模型図まである。そうだ。伊能大図も当然その中に含まれている。

未来肯定的な信念に感心！

「アーモンド・エーベール博士もその一員で図書館の未来について、決して心配せず、未来肯定的な信念があるのだろう。

明治五年の久米邦武「米欧回観実記」によれば

「連邦議会議事堂西ヲ正面トス。右翼ヲ上議院、左翼ヲ下議院トス。又書庫ヲオキテ、古來の典章記録ヲ藏セリ」  
「千百年ノ智識、之ヲ積メハ文明ノ光ヲ生ス、之ヲ散スルトキハ、終古葛天氏の民ナリ」と記す。

#### 伊能大図流出の経緯にも関心！

電子化、国際化の時代になり、議会図書館のサービス活動は豊かさを増している。これから始まる「伊能大図（米国）展」の要請についても、当初は渡辺代表がご苦労されたが結果は快く応諾してくれている。若い国アメリカには古い建築物、美術品といった文化財がない。このため、かえつて古いものを集めたい、大事にしたいとの思いが伝統や固定概念に支配されない新たな図書館像として育ち、この二百年での大きな成長になっているようだ。この新しい伝統に期待したい。

ホームページはザ・ライブラリイ・オブ・コングレス。一九八〇年に完成した近代様式の第二別館はマディソンビルといい連邦政府の建物では国防総省、F B Iについて大きい。ジェーエフ・アーリンビルの本館、アールデコ様式のアダムスビル別館など、創成期の大統領名の付けられたこの図書館に関して、新しい話題をお待ちしています。

（福田弘行）

\*参考文献 藤野幸雄著 アメリカ議会図書館 中公新書  
寺田光孝編 世界の図書館 勉誠出版

朝日新聞・01年11月16日から

コラム・飛鳥長目 梶本章記者(くらし編集部)

「年をとつても目標を持ち元気に歩き回り、73歳まで生きた。21世紀の高齢者はこうでないとね。ぜひ見てください」。厚生労働省の辻哲夫年金局長から17日に封切られる映画「伊能忠敬」の試写会の案内をもらった。

高齢者医療や介護制度の整備も大事だが、お年寄りが元気に過ごせるようにする健康政策にもっと力を入れるべきだ、が辻さんの持論。同省が医療制度改革にあたってまとめた「課題と視点」に、そんな思いを込めて生涯を通じた健康づくりを目指す「健康日本21」の推進を盛り込んだ。

辻さんは、そんななかで伊能忠敬のことを知り、伊能さんこそ「期待される老人像」と思い当たったのだという。確かに伊能さんのように元気で過ごせたら、医療や介護の費用も心配しなくていい。

早速、文部科学省や国土交通省と並んで厚労省も推薦する映画をみた。その評価はさておき、伊能忠敬を演じた加藤剛さんが同省主催の「健康日本21」の推進国民会議に委員として出席すると聞き、二ちらもぞいてみた。

会議そのものは同省のOB会のような雰囲気だった。しかし、ここでは女優の市毛良枝さんのあいさつがとてもよかつた。前半は若さで飛ばし、その後は仕事が趣味としかいよいのない拘束を受け、自分の健康など顧みる暇もない状況が続きました。でもキリマンジャロを

登山して高山病で苦しみながら自分の体を前へ動かしていったとき、健康って大事だなと意識するようになりました。それでいろいろ運動するようになり、気がついたら15歳からの肩こり、17歳からのギックリ腰がなくなり、ああ体って動かせば自分で治るんだと思いました」会議が終わつた後は、加藤さんとも立ち話した。

「伊能さんは当時としては相当な長生きです。自分が本当にやりたい夢を持っていて、49歳で隠居してからだれにも迷惑をかけずに実現したのはすばらしい。頭を使いながら歩くというバランスがいい。私も伊能さんと同じ年代となつて健康であること、歩くことの意味を知りましたね」

そんな話を聞いていて、会社の先輩Iさんのことを思い出した。朝日新聞も2年前から1年かけて「伊能ウオーカー」という歩け歩け運動をやつていたが、記者をやめたIさんはその事務局で企画を練りつづ自ら歩いていた。今年、定年で退社した後は中国へ留学し、そこで今、日本語を教えながら中国語を勉強している。それでどうするのか詳しく述べは聞かなかつたが、いい話だと思っていた。Iさんも案外、伊能さんの影響を受けたのかもしれない。

「期待される老人像」といえば、高校生のころは文部省が「期待される人間像」を打ち出したことがあつた。《自由であること、家庭を愛の場とすること、仕事に打ち込むこと、正しい愛国心をもつこと》などと期待され、「余計なお世語だ」と反発したのを思い出す。これに始まり団塊の世代は老後も何やら期待されてしまうのかしれない。しかし、それでも伊能忠敬には35年前のような反発を感じない。まあ、こちらが伊能さんと同じ年代になつたからか……。

\*昨年の記事ですが「新しい歩み」がどこかにあります。

## 九州支部 春季例会報告

石川 清一

支部が発足してあつと言う間に五年たちました。年一回、春の例会と、夏の研究旅行、秋の共催行事(伊能図展、記念碑落成等)、十二月の忘年会(一、二年前から)と毎年なんとか続いてきています。会員は23名になり当初より少しづつ増えています。あと10名位増えると、もっと充実した活動が出来ると思っています。

さる六月二十二日(土)に本年度例会を福岡市博多区地域交流センター「さざんびあ博多」で開催しました。当日は佐賀県から松尾(紀)会員が出席。また地元からは寺崎会員の初出席に、旧知のメンバーを含む13名(井上、河島、古賀(英)、中富、野田、原口、橋本、本田、村井、熊谷、石川)の出席を得て、午後一時から始めました。

最初に、渡辺代表理事からのメッセージの披露、支部の経過報告、六月八日に富岡八幡宮で開催した本部総会、公開講演会や翌日行われた「全日本歩測大会」の模様等を私から報告し講演の部に移りました。

トップバッターに国土地理院九州地方測量部・根本寿男部長から「国立歴史民俗博物館の伊能大図発見の経緯」の講演がありました。同氏は本年三月末まで地理院地図編集課長でした。昨年、当研究会渡辺代表による米議会図書館での伊能大図発見の後、反響が続いている



北九州市・紫川・常盤樹脇に記念碑誕生



盛り上がった講演会のもよう

中で、国立民俗博物館所蔵の二枚が同セットと同じではないかと閃き、調査を進め、図の形態、大きさ、描画様式、収図範囲等が最終的に未発見部分の二面であることが確認されたことは、ご承知の通りですが、この二面、第34号「蝦夷 江指 熊石」、第35号「蝦夷 ヲコシリ島」の発見の経緯を資料を駆使して話され、推理小説を読む思いで堪能いたしました。

次いで当研究会の井上辰男日本測量協会九州支所専門役による「神戸市立博物館の伊能大図について」の講演では、大図が私たちに身近な九州北部の北九州、筑豊なので興味深く拝聴しました。同氏はこの一、二年、勤務の合間に神戸へ行きコツコツと研究されており、まだ研究成果は中間的な段階との事で今後の発表が楽しみです。

三つ目の講演は㈱ゼンリン・山岡光治部長の「伊能図からはじまる近代地図作りの歴史」で、明治以降のフランス式ードイツ式ーアメリカ式と変ってきた地図作りの歴史や、遊びの地図、見て楽しい地図について、同氏の国土地理院時代の豊富な知識経験をもとに、多彩なお話を頂きました。

各講師とも熱気溢れるお話で一同引き込まれました。休日にもかかわらず講演を快くお引受け頂き感謝しております。

続いて昨秋完成した北九州小倉の「伊能忠敬記念碑」の竣工報告が建設実行委員会・村井会長、熊谷事務局長からあり、最後に本年度研究旅行を広島県呉市の「入船山記念館」(収蔵物ー浦島測量之図、御手洗測量之図)に秋頃行う事が決まりました。

午後五時に例会は終了し、引き続き場所を移して懇親会を中華料理店で開き、閉会予定の七時が延び、八時過ぎになりました。

忠敬先生を肴に大いに盛り上がった一日でした。

(九州支部長)



九州支部のみなさん 後列左から原口、古賀、本田、橋本、井上、野田

前列左から中富、河島、石川、村井、熊谷、松尾の各氏

## 忠敬談話室だより

山本公之

### ○海を越えた伊能大図紹介の動きその後

去年の十一月十七日 明治大学駿河台校舎中央図書館にて、「新発見の伊能大図を巡つて」と題して調査員の一員で、会員の鈴木純子氏が講演。明治大学人文科学研究所・蘆田文庫編纂委員会公開勉強会が共催の形でおこなわれた。

今年に入つては、二月十六日には「測量と地図の市民講座」が、学校法人中央工学校（東京都北区王子）で、測量と地図の基礎知識、測量・地図のトピックス（伊能大図発見）として測量法改正と世界測地系の概要の内容と併せて紹介された。（社）日本測量協会・（財）日本地図センターの主催で、後援が・国土交通省国土地理院となつてゐる。前者は学会消息として（歴史雑誌『日本歴史』1月号）に所載。後者は測量や地図に興味のある方、知りたい方が対象で、ポスターによる呼びかけ開放努力型であった。いずれも主催者側に敬意を表したい。

また、今年の国土地理院・技術研究発表会で九州地方測量部長根本寿男氏が「伊能図と近代日本の地図作成」と題し、東京・新宿・安田生命ホールで、六月四日（火）十三時五五分から十四時二十分と短時間であるが発表された。

### ○忠敬さんにプラネタリウムを見せてあげたかった

ノーベル賞100周年記念展が東京・上野の国立科学博物館で開催

された。ミュージアムショップから出口に向かって行くと、扇子を膝に押し付けた浅葱色の袴姿。言わずと知れた伊能忠敬のポスター。私が此處に居るでは無いかと、静かに温かく見つめているようだつた。

2002春 プラネタリウム番組 No.26 「星からの地図づくり—伊能忠敬—」3月9日（土）から6月16日（日）相模原市立博物館とあつた。ラッキーな事に明日までやつてゐるのだ。



高橋至時と忠敬との対話形式で、子供にも充分わかるように動く似顔絵アニメで進行。最後は間宮林蔵肖像と「大日本沿海実測図」でまとめられている。昼は交会法、導線法の方法で測量、夜は星の高度を求め、木星の四大衛星の動きを観測。測量日数の三分の一以上を地図作成の上で原点となる全国数十箇所の地点で、晴天の夜を迎えるまで待ち続けたと地名をあげて解説されているなど二十分位だが、ひと時

先人の足跡を楽しんでもらえた。プラネタリウムとは着想がいい。

脚本・相模原市立博物館・制作・五藤光学研究所・監修・渡辺一郎となつてはいる字幕にピックリ。あとで歓談した学芸員の杉本芳秋さんが、飯田橋の研究会事務所に相談に来たこと、第9次伊豆七島測量の帰り伊勢原・厚木と周つて相模原に三泊した。

因みに明治政府が全国地図を作る必要から、三角測量と言う近代測量によつて行われた国土測量の最初の基線『相模野基線』は、現在の相模原市と座間市で結ばれた直線(5209・969667メートル)で、本格的に、この基線を元に全国規模の測量が行われ、大正14年までに全国5万分の1の地形図が完成されたと、去年の夏季特別展図録「星の測量、角度をはかり位置をもとめる」にあつた。

#### 長い距離を測るのに精度はきびしい 昔から今も

また、「訪ねてみたい地図測量史跡」山岡光治著(古今書院)には、113基線・全国の紹介には下4桁まで四捨五入されている数値で省略されていた。明治十五年観測5209・9697mと記載される。陸地測量部の測量師にして、「一度は行なうべし。二度とやるべき仕事にあらず。」と言わせたほど、相対精度で100万分の1という精度が要求され、4m測竿、25m基準尺、などを使つた時代があつた。陸地測量部の測量師にして、「一度は行なうべし。二度とやるべき仕事にあらず。」と言わせたほど、相対精度で100万分の1という精度が要求され、4m測竿、25m基準尺、などを使つた時代があつた。明治十五年観測5209・9697mと記載される。

つて、りつばな地図をつくつた」と、佐原の諏訪公園忠敬銅像台座に文字が刻まれた。前号二八号にある「温故知新」の塩谷温の父塩谷青山の揮毫である。添え書に坪観東河先生地図検書 昌平坂於玉ヶ池塙検校宅等 不勝感慨附記為念とある。

この昌平坂云々塙検校こと、塙保己一は、(目明きとは不自由なものよ。灯りがないと物が見えないとは)などの周知の逸話などで有名な盲目の学者である。延享三年に生まれた。忠敬が延享二年だから、ひとつ違ひと言う事になる。七歳のとき、肝の病のため盲目となる。「見てごらん。ずいぶんゆっくり歩いているね。ああやつて歩きながらちゃんと歩数を数えているのじや。下手に手を出しちゃ駄目だよ」と龍清寺の和尚が、母親きよに諭したと後世の伝記ものがたりは語る。ここでいう歩数を数えてとは、歩測とは全くの別世界かと思うけれど、その区別は知る由も無い。目の不自由なことより、心に確かな耳と目と口を持つた生涯に教えられるのではないだろうか。

#### ○芳名録余談

#### 温故知新・番外寄り道も楽しからずや

「仰いでは斗象を瞻、俯しては山川を畫く、意味は天体の観測を行



塙保己一の肖像画(さいたま文学館)

その塙検校は、当時の重要な文教政策を行なつた松平定信に「国学」研究の学校を設立したいと、一個人として寛政五年（1793）一月、願い出る。四月に寺社奉行を通じて敷地貸与の許可が下り、塙氏の家塾で発足、十一月には脱皮して官学となつた。幕府直轄の国学講談所設立となる。定信は、乞われて「温故堂」（扁額は温古堂）と名づけた。温故知新から出ている事には間違いない。定信が老中を辞職したのと同じ月となつてゐるのには、些か偶然と言うものを感じさせる。官学としての昌平坂学問所は「儒学」とりわけ階級性を重んじる朱子学中心で、封建制維持を唯一の目的とする幕府の大いなる精神的支柱だつた。また於玉が池附近は、それぞれの目的を持つ学者・文化人が多いところとして有名であつた。これらの事柄が添え書きの昌平坂・於玉が池・塙検校の由来であろう。

「かかる資本を要する大事業がいかにして成し遂げられたといふには、幕府の保護は偉大な力であった。殊に佐野の藩主にして幕府の若年寄たる堀田攝津守、寺社奉行脇坂淡路守、昌平坂学問所の大学頭林述斎などが力を入れ、御三家といわれる尾州、紀州、水戸もこれを支持した」とある。また、若年寄堀田攝津守正敦は、寛政11年（1799）幕府、「寛政重脩諸家譜」の編纂に着手。その総裁になるなどこれも実に興味を引く。

「学校をおこし、群書類從百巻を校訂して、刊本とせられたり。天下の学者、たやすく古書をうかがふことを得しは、實に検校保己一のたまものといふべし。」と業績に対する賛辞。そのついでといつてなんだが、図書館の資料室の棚で偶然発見した日本歴史学会編 肖像選集（昭和四十年代発行）に、137伊能忠敬 138塙保己一と隣り合わせの縁は、さらに千葉に伊能忠敬あり、埼玉に塙保己一と、共に

同じ世代に生まれ、次代に貢献した功績を両県で称えている。  
どちらかと言うと保己一の業績を知らなかつた自分を恥かしいと思つた。それは別として、全国各地の研究会会員の交互の連携によつて、伊能忠敬研究が深くなる兆しがあることは頗もしい限りです。前進への努力を惜しまない各位にエールを送りたい。

「百歩より更にはじまる第一歩」という戦後まもなくの川上三太郎の川柳にあつたのを想い出した。

□朝日新聞・埼玉版：回り舞台「塙保己一」 99・9・21-26 内藤章記者

- ① ヘレン・ケラーリー「奇跡の人」が愛した学者
- ② ふるさとで郷土の偉人に再び「光」を
- ③ 「類従の世界」を旅して選んだ「書籍の精」
- ④ 世界へ次代へ引き継がれる精神
- ⑤ 子供たちへ障害者の「理想像」生きた

□塙保己一（はなわ・ほきいち）

延享3年（1746）5月5日に現在の児玉町保木野の農家に生まれる6歳で視力を失い、11歳で母をなくし、13歳で江戸に出て雨富検校の門人に。針きぬう治療や音曲は不得意だったが、驚異的な記憶力が人々を感嘆させる。元来好きだった学問の道を目指し、国学の大家・賀茂真淵の最晩年に入学。日本の古典文献を網羅して、いまも日本史や国文学など研究に欠かせない叢書「群書類從」全666冊（国の重要文化財）を編さんする一方、幕府の援助を受けて国学研究機関「和学講談所」を開設。盲人組織の最高位となる総検校となつて、将軍にもお目見え。文政4年（1821）、75歳で死去。業績を顕彰する温故学会は渋沢栄一らによつて明治42年（1909）に設立された。

会員のみなさんの近況報告から

□世田谷北部における郷土史文化財保護に努力しております。月刊誌等に寄稿し連載中です。ご健斗を祈ります。

【世田谷区・大庭伊兵衛氏】

□あいかわらず、ドイツ文献とつきあつております。それだけに『伊能忠敬研究』から新鮮な刺戟（現代では刺激ですか？）を受けますし、また、例会も総会も懇親会もたのしみです。【逗子市・秋間実氏】

□昨年九月完成の北九州市小倉の「伊能忠敬記念碑」（会報27号参照）に国土地理院本院から九州地測出張の折に見学が続出しています。3／27星埜地理院長、4／19堀野正勝測図部長。いずれも小生がご案内致しました。一行は大変喜んでくれました。

【福岡市・石川清一氏】

□あつと云う間の桜でした。今はつづじがそちこちで燃えて居ります。会報、充実した毎号、難しい時もございますが感謝して拝見して居ります。皆様のご健康を祈りつつ。

【所沢市・井上靖子氏】

□昨年九月から、以前の会社から頼まれて、年甲斐もなく仕事にでかけています。研究会とも離れてしまつたような気がしてなりません。昨年やりかけた忠敬さんの埼玉県下を歩いた場所の資料を完成できるのがいつになるやら。埼玉県の古い地図を探しています。

先日、五月一日に出た「江戸の旅人」という本に、伊能忠敬の項がありました。中の文面は新しい見方での記述のように思いました。

私は埼玉県に住んでいることもあり、忠敬さんの県下の足跡を追つて見たいと思い、測量日記から埼玉県内の日記を抜きだしました。その中に記述されている地名を、現在の地名と対比していこうと思つています。現在の地図では、同地名というのは比較的大きい土地は対応しますが、村名（現在残つていれば字名クラスだと思います）が、なかなか対比するのが大変です。手元にある明治二二年の埼玉県管内全図が役にたつています。それみると、比較的伊能図の村名と同じ地名の記載があります。村名が、字クラスの地名として記載されているようです。通勤経路に、測量日記にててくる扇町屋宿のあつた土地通り、忠敬さんを偲ぶよすがとしているようなものです。

\*論文集を送つていただきました。19頁に一部紹介まで。

【茨城県・大谷恒彦氏】

□研究会が年々盛大になりうれしいことです。新しい発見が次々とあります。勉強が追いつきません。完全リタイア後ゆつくりと拝見したく準備中です。

【藤沢市・大沼晃氏】

□過日、親戚を伴つて北茨城市的野口雨情生家を訪れました。陳列棚

【狭山市・加藤巷児氏】

の隅にあの時の伊能ウオーカー手拭が掲げてありました。孫の不二子さんは、これをみつけて「伊能ウオーカー隊が来たのですか?」と問う人が多く、大事にしているそうです。今年は雨情生誕一二〇年です。

【水戸市・川上清氏】

□昨年「佐原町並を守る会」の二五名で富岡八幡宮及び門前仲町近辺を回りました。宮司さんも佐原の高校に在席されたそうです。また八幡宮のおはなし等も伺いたいと思っております。

【佐原市・北田明子氏】

□旧聞ですが、平成二年四月に「びっくり仰天記」(加賀藩の「垂搖球儀」発見とうたつてある)という本が刊行されました。発行所は「江戸民具街道」という、おもしろ体験博物館です。垂搖球儀は伊能忠敬記念館にもたしか二台あったと思います。ご参考まで。

【府中市・首藤郁夫氏】

□伊能ウオーカー応援のため山から降りて里歩きを楽しみましたが、現在山岳宗教の行に参加するよう努めています。本人は行者の気には近かずけない冷やかしながら、(この年令になつて)向学のための参加をおだてられてます。この程度の意識の人を受け入れないと成り立なくなつてゐる現実があります。日常と隔絶した世界に半身を置いて、自分を改めて見つめようと思う今頃です。

【我孫子市・土肥規男氏】

□伊能忠敬関係の刊行本や地図は入手しています。三十年来のライフワークの「ヒマラヤ6000m峰リスト」と「ヒマラヤ5万分一地図」

を作成中。ほかにお琴のビデオ撮り、ボランティアで月三回位活動しています。

【城陽市・豊島正氏】

□「四千万歩の男」全五巻を読んでいるうちに部屋いっぱいに地図を拡げ、忠敬翁の宿泊地に○印をつけたりと、とても関心を持ちました。そしてやつと見つけ出しました。渡辺代表が日経新聞の平成七年十一月七日に出された「仏を旅し、帰った伊能地図」のスクラップを。拝読する少し前に「四千万歩の男」を読み、とても関心を持つたときでしたので、すぐスクラップしたのですが、整理をしないままの為探し出すのが大変でした。

【米沢市・中村俱子氏】

□頼まれて各地の街道歩きの案内をしています。併せて伊能忠敬のPRもしています。

【大野城市・野田茂生氏】

□自分流で兵庫県下の伊能隊の通つたところを歩いて楽しんでいます。高齢者のいなみ野学園で、ときどき伊能忠敬に関する事を話題にしています。

【神戸市・藤原繁氏】

□三月二七日に星雲国土地理院長、四月一九日に堀野測図部長が伊能忠敬二百年記念碑を視察において下さいました。小瀬健一氏の「割円八線対数表」の誤記、わからないながらも大へん面白く拝読いたしました。

【北九州市・村井純孝氏】

\*お便りをありがとうございました。四月、五月の到着分です。  
みなさま、どうぞこれからもお元気でご活躍を!。

## 伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。  
二、つぎのような活動をおこなっております。

### ①会報の発行

発表誌 年三回以上、 交流誌 随時

### ②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

### ④その他付帯する事業

### 三、入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号、FAX番号などを明記し、通信欄には専門分野、趣味分野、入会の動機、本会に対する希望など御意見を書き添えて、入会金四千円、年会費六千円、合計一万元を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバツクナンバーをすべてお送りします。

送金先 (室番が六一八に変更。乞御注意)

〒一六二 東京都新宿区下宮比町二の二八の六一八

伊能忠敬研究会

郵便振替口座 〇〇一五〇一六一〇七一八六一〇

## 投稿規定

会員は発表誌、交流誌に投稿することができます。一回の掲載は、原則として四頁です。越える場合は分載または、間隔をおいて掲載します。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任して下さい。

一頁は二段組31字×26行、三段組20字×30行です。タイトルは五行分とします。写真、図表は大きさを考慮して下さい。

## 伊能忠敬研究会のホームページ

伊能忠敬研究会のホームページは三つあります。一般情報は大友常任理事の担当です。それぞれがリンクしています。

<http://www.2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、伊能忠敬関連史料リストなどが御覧いただけます。

<http://www.cityfujisawa.ne.jp/~t-sakamo>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。1)の忠敬の書斎にも是非お越し下さい。

<http://www.tt.rim.or.jp/~kokko>

## 編集後記

○梅雨入り前に梅雨あけのような快晴の一日、公開講演会に一般応募の多くの忠敬ファンが集まる。関心度の高まりを感じ、ぜひ会員にと期待が増します。会員各位のご支援、ご協力に御礼申し上げます。○忠敬さんはたぶん自分以後の時代を感知しており、残された地図と膨大な記録はそのメッセージでしょうか。研究会も時代の方向を探りながら歩んでいます。紙面での情報伝達が主体です。忌憚のないみなさんのお気持ちが紙面を創ります。各方面に記事、ニュースが広がり、公立図書館など「会報」への問い合わせが増えてきました。

○平成の忠敬さんです。事件後の中国は瀋陽の総領事館前に。飛んで北米から中南米、欧州からアーランドやアイスランドにも。奥様と四十日の地球漫遊。戻ると旧娘夷地を1200。忠敬の足跡を辿る。その体力、気力にO力。まだ続きます。たぶん次の測量と地図は宇宙でしょう。同名のお孫さん? 大リーグでも大活躍ですね。(F)

# THE INOH TADATAKA JOURNAL

## STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.29 2002



### TOPICS

Some new documents are found	Editorial Staff	1
Report of the Annual Meeting & General Meeting	Editorial Department	6
Tadataka's book on astronomical observation [The Niigata Nippo]		5
Large-scale Inoh Maps are colored again [The Asahi]		9
FROM VISITORS' RESISTERS	Inoh Yoko	10
MATERIALS		
Role of Inoh Maps in modern times —Gun Kan KU Zu—	Shimizu Yasuo	11
Study of "Map of Japan" compiled by Edo Government(3)	Takagi Takayoshi	14
Family Documents 20 : Tadataka and Rinzo Mamiya(1)	Ando Yukiko	20
Footmarks of Inoh's team on the coast of South Sanriku	Watanabe Kenzo	24
Nishimura Tachu, an astronomer in Kaga(2)	Kawasaki Michiyo	28
Edo-Diary : Tadataka's visitors and his visited places	Sakuma Tatsuo	34
ESSAYS		
Acknowledgement : Memories of Inoh Walk	Ueda Katsutoshi	39
Making "Lodgings List" of Inoh Survey Team	Sakamoto Takashi	42
REGIONAL MATERIAL		
Diary of Inoh in Edo (8)	Sakuma Tatsuo	44
THE DAIRY TOPICS OF THE OFFICE	Editorial Staff	52
BRANCH REPORT		
Spring Meeting of Kyusyu Branch	Ishikawa Seiichi	58
MEETING ROOM	Yamamoto Kimiyuki	60
Recent Reports from members	Editorial Department	63

Edited and Published  
by  
THE INOH TADATAKA SOCIETY